國語讀本

巻二

375.9
Ue4
資料室

41545
教科書文庫
4
810
41-1925
20000
44031

375.9
Ue4

資料室

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共編
塩野新次郎

國語讀本

東京
株式會社 啓成社

廣島大學圖書之印

廣島大學教
44631
圖

國語讀本 卷二

目次

一 會得……沼波瓊音……一
熟語……四
二 近江聖人……橘南谿……五
藤樹書院……高瀨武次郎……一三
三 滋賀の山越……村井弦齋……一四
四 畝傍山……落合直文……二三
五 昇仙峽（書簡文）……德富蘆花……二七
口語と書簡文語……三〇

六 童謠三篇（詩）……三一
里こゝろ……北原白秋……三一
草鞋よ……若山牧水……三二
電車の窓から……西川勉……三三
七 美しき球……矢島鐘一……三五
八 心の修行……村井弦齋……四一
熟語……四五
九 鍛錬……河上肇……四五
詩歌一首……五〇
一〇 朝鮮雜觀……芳賀矢一……五一
一一 滿洲の野……夏目漱石……六三
熟語……六九
一二 病床放語……正岡子規……七〇

一三 漱石と子規（自修文）……高濱虛子……七四
夏三句……七七
一四 眞の勇氣……坪內逍遙……七七
熟語……八一
一五 加藤清正の大度……岡谷繁實……八一
一六 八道の山（詩）……大町桂月……八四
一七 大石良雄……山路愛山……八九
薩南の美風……田中白茅……一〇三
一八 切腹の話……木宮泰彥……一〇五
漢字の音符……一一一
一九 兎狩……德富蘆花……一一一
漢字の構成……（漢字雜話）……一一七
二〇 休暇日記……（日記文範）……一一八

二二 日記の七德……三上參次…一三三
二三 句讀點……薄田泣菫…一三六
二三 わが幼き頃……新井白石…一三九
新井白石……一三七
二四 伊能忠敬の晩學……幸田露伴…一三九
師說……韓退之…一四六
二五 雪國の友へ（書簡文）……阿部次郎…一四七
二六 雀……北原白秋…一四八
雀五句……小林一茶…一五三
二七 太陽と春（詩）……福田正夫…一五四
二八 爆彈下のパリ……吉江喬松…一五七
二九 佐久間大尉……一六三
和歌一首……與謝野寛…一六九

三〇 明治天皇の御遺物を拜す……笠井信一…一七〇
物數稱呼……一八四

國語讀本　卷二

一　會得

沼波瓊音

沼波瓊音
名は武夫、愛知縣の人、俳諧研究家、東京帝國大學講師。

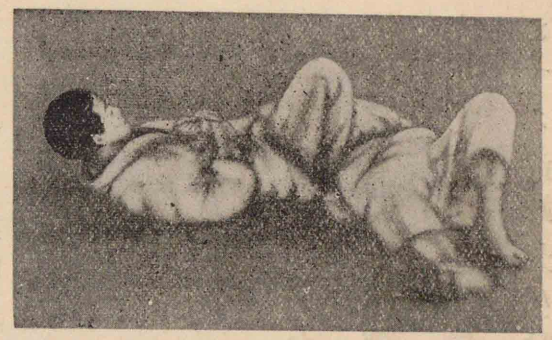
高等學校に居た頃、少しばかりは柔術を稽古した。或日僕は某と云ふ黑帶の先生と組んだ。習つた術をいろ〳〵應用して居る内、僕はドタンと仰向に倒された。起上らうとする途端、先生は僕の右手を抱へ込み、仰向になつて、僕の胸の上へ斜に乘つてしまつた。先生は肥つた人であるが、體は綿のやうに輕い。輕いけれども、どうしても押除ける

疊（疊）

ことが出來ぬ。足で疊を蹴つて起きようとしてもだめだ。焦慮つて體を動かすと、先生の體も從つて動く。二人の體はX字形をなした儘で、ぐるぐる疊の上を廻るばかりである。

やがて先生は體を外して、自分が下になり、僕をして先生がやつたやうに上に乘らせて、「斯う壓へられた時には斯うすれば起きられる。」と云ひ樣、ぐるりと起きると、忽ち僕が下になつた。

これから此の起きる法を學ぶ爲に、前の通り先生に壓へられ、先生のやつたやうに起きようと試



柔道の稽古

みた。「だめだ。」と先生は大喝した。「自分ばかり起きようとするからだめだ。我と敵と一體になつて起きれば譯はない。」僕は汗を流して屢、試みる內、熟練したのか、疲れた爲か、全く我を忘れて、夢の如く起上る。「さうだ。」と先生が言つた時、僕は先生の大きな體の上になつて居たのである。『身を棄てゝこそ浮ぶ瀨もあれ。』といふことは此所です。今の心持を忘れちやいけませんよ。」と先生が言つた。

身を棄てて　山河の末に流るゝとちがらも、みをすてこそ浮ぶ瀨もあれ。（空也上人）

其の後屢、試みたが、實に譯なく起きられる。今は其の術の名なんか忘れてしまつたが、起上る時の心持はよく覺えて居る。其の時に僕は其の術を會得したと共に、會得といふことの意味をも始めて會得した。「我と敵と一體になる。」

「身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあれ。」こんな話を何度聞いたつて何度讀んだつて、起上ることは出來ぬものだ。自ら敵と一體になり得、自ら身を棄て得たその刹那に、この語を味はつて、はつと思ふと、偶然爲し得た際の心の情態、體の情態が、正確に明晰に意識され、其の意識は大磐石の如く胸に凝つて、永久小動ぎもしない。會得したといふのはこの情態を云ふのである。文字に依つてのみ事を知らんとする輩は、前記の語を諳記して敵を組み伏せようとする者ではあるまいか

刹殺　磐盤

情態＝狀態　諳記＝暗記　技倆＝伎倆
書翰＝書簡　智識＝知識　榮養＝營養

橘南谿　名は春暉、伊勢の人、京都にて醫を業とす、德川時代の旅行家、文化二年（約一二〇年前）歿、年五十三。

中江藤樹　近江の人、名は原、通稱與右衛門、世に近江聖人と稱す。德川時代の儒者、慶安元年（約二八〇年前）歿、年四十一。

小川村　高島郡にあり、今青柳村に屬す。

王陽明　名は守仁、支那明代の大儒、良知の說を立てて一世の師表たり、（約四百年前）歿、年五十七。

二　近江聖人

中江藤樹肖像

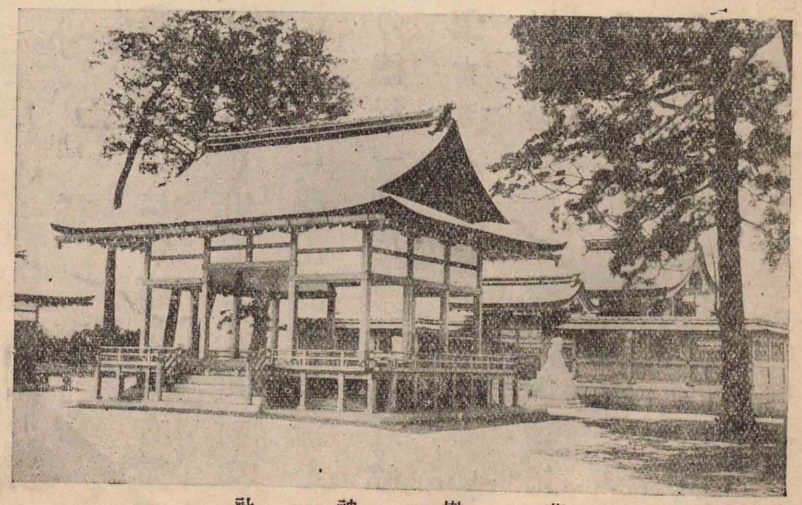
橘　南谿

中江藤樹先生は、俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家にうまれ、學、王陽明の流を汲みて、その德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。

先生の歿後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふと、先生の墓所、小川村に在りと聞き、その村に尋ね行きて、路傍の農夫に向ひ、「先生の墓所は」と問へるに、農夫は「畑道なれば知れ申すまじ。案内致し參らせん」とて、士人を導きて行きけり。

程なく、小さき藁屋の前に出でけるが、「しばし待ち給へ。」とて、農夫は内に入り、やがて出で來るを見れば、木綿の、新しき著物のうへに、紋附きたる羽織を著たり。　士人は驚きて、さても丁寧なる男かなと思ひて、附きてゆくほどに、やがて墓所に到りぬ。　農夫は、竹垣の戸を開き、「いざ入りて拜し給へ。」といひて、その身は

垣垣



藤樹神社

戸外に退きて、恭しく拜伏せり。　士人はこの樣を見て再び驚き、さては、衣服を更めたるは我に對する爲にはあらで、先生を敬する爲にてありけるよと思ひつきければ、農夫に向ひて、「汝は藤樹先生の家來筋の者なるか。」と問ひぬ。　農夫は詞を改めて、「さには候はず。　されど、この村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざるものなし。我等が親を敬ひ子を慈むことを辨へ知りたるは、皆これ先生の御恩なれば、子々孫々必ずその御恩を忘るべからず。」と、わが父母常に教へ候ひき。」と答へたり。　士人は、そのはじめ、たゞ何となく一見せんとの心にて來れるが、この農夫の擧動によりて、俄かに敬慕の念を起し、懇に、その墓前に禮拜して歸りきとぞ。

擧（挙）
歸（帰）

この一事、以て先生の德行のいかに高くして、又その化育のいかによく下に及びしかを見るに足らん。

熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の、先生に從ひし始を尋ぬるに、面白き話あり。

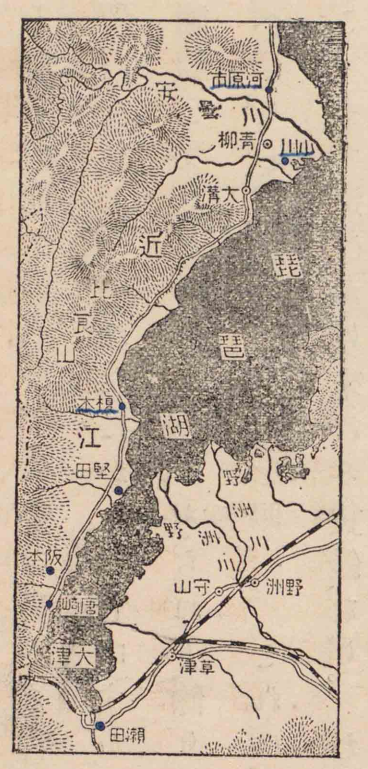
熊澤蕃山　名は伯繼、京都の人、備前侯池田光政に事へて功あり。元祿四年（約二三〇年前）歿、年七十三。

その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、いそぎ榎木に走り行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面して委しく尋ね問ふに、相違無ければ、その金を取出して返し

河原市　高島郡。
榎木宿　滋賀郡。

けり。飛脚は死したる者の蘇りたるこゝちして、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、「もしこの二百兩なくば、わが一命を失ふのみならず、親兄弟までも、重き罪に行はれん。されば、この恩なかなか言葉のいひ盡すべきにあらず。まづ當座の御禮までにこれを贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける顏色にて、「そなたの金を、そなたに取納め給ふに、何の禮いふことかあるべき。」とて、手にだに取らず。

蘇・穌
兩・雨



湖西地方

色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故、止むことを得ず、十兩となし五兩となし、三兩となし、段々減じて、遂には金二歩となし「せめて、これぱかりは」と、理を盡し詞を盡していふに「この金を受くる程ならば、二百兩をも留置くべし。それだにかく返し申すからには、聊かにても謝禮を受くるはわが心にあらねど、餘りに餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは、今夜休むべき所を、こゝまで追ひかけ來れる賃錢なり。わが取るべき錢なれば、申し請くべし。」といひて、二百文を懷にし歸らんとす。

飛脚は感に堪へかねて、その氏素性を尋ね問ふに「名ある者にあらず。又、何一つ知れる者にあらず。たゞ我が在所

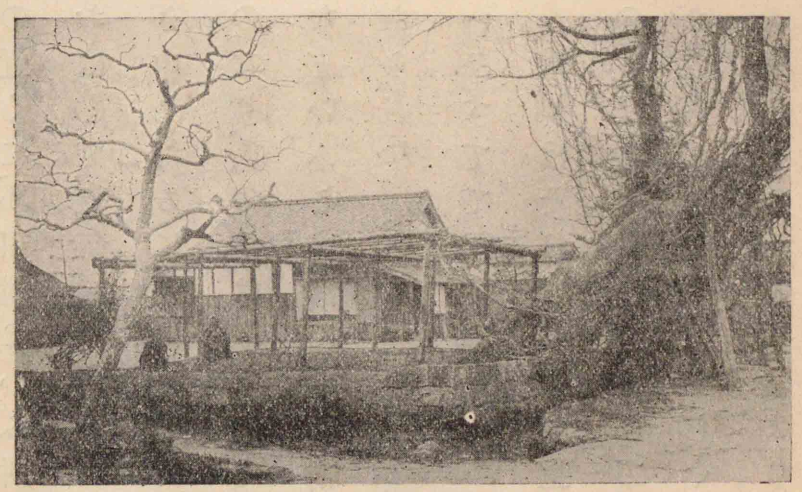
盡（尽）
禮（礼）

の近くに、小川村といふ所あり。そこに與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節往きて聞き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、わが物にあらざれば、取るべき理なしと心得たるまでのことなり。」といひすてて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さても、この度は辛き命活きのびて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山、をりふし田舍よりのぼり居て、學問修業の最中なり

釋（釈）



藤樹書院の古藤

けるが、この物語を聞きて、その人こそ誠の儒といふものなれとて、翌日すぐに江州にゆきて、小川村に藤樹先生を尋ねて隨從を願ひたるに、「人に教へ申すほどの學德なし。」とて更に許し給はず。蕃山ひたすらに願ひて、二日が間、先生の門にたゝずみて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、「よしや。まづ内に入

辭（舜・辞）

備前侯　岡山の城主池田光政、賢君の名あり、天和二年（約二四〇年前）歿、年七十四。

東遊記　南谿が東海・東山・北陸地方を旅行せし時の見聞記、十卷あり。

藤樹書院　滋賀縣高島郡青柳村字小川にあり、藤樹の舊宅。

れ申せよ。」とあるに、辭みがたくて内に入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、「門人熊澤といふものあり。御役にも立つべきものなり。」とて、蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。（「東遊記」による）

藤樹書院に着きしは黄昏の頃なりき。門前の石には藤樹遺跡と大書せり。書院は平屋建一棟にて南向の家なり。この建物は近年火災に罹りたる後の建築にて、その規模の小なる、舊の書院に比すべくもあらずといふ。書院の西北隅に大いなる古藤あり。先生の嘗てその下に書を講ぜられし樹な

（明治十三年九月）

りといふ。側に一棟の寶物庫あり。書院の正面に「致良知」の額あり。院に上れば「藤樹書院」及び「德本堂」の二額あり。壇上には先生及び累代の神位を列ぬ。進みてその前に額づき、先生の容儀道德を追想すれば、聖人の靈、髣髴として照臨するものの如し。（藤樹書院——高瀨武次郎）

三　滋賀の山越

村井弦齋

「雪ならば幾たび袖を拂はまし、花の吹雪の滋賀の山越。」それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の眺も飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を沒し、凛冽たる風は膚を裂く。辛苦の内に滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。唐崎の松は暮

滋賀の山越　京都より滋賀縣の阪本・唐崎へ出づる山道。
村井弦齋　名は寛、小說家、雜誌記者。
唐崎・堅田・比良　琵琶湖の西にあり、所謂近江八景の一。

靄朦朧の間に隱れて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴き渡る。見渡せば白皚々たる比良の雪、今より此の山路に掛らば、山中にて日は暮れん、疲れし足の進み難きに、坂本邊にて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで暫く湖畔に立ちたりしが、良ありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷、今一息にて母君の許に着くなるに、何とて空しく此所に留まらん。夜にてもあれ、朝にてもあれ、家に歸らば疲も厭はじ、いで〳〵心を取直し、今宵の中に此の山を越えんものをと、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそは掛りけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖に縋りて只一人、辿り〳〵て行く道の、岩に躓き木の

坂本　比叡山の東麓。
厭歷
藤太郎　中江藤樹の幼名。

響饗

根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、猶も心を勵まして、風雪の中を登り行く。　軈て日は暮れたり。　闇の夜ながら雪明りに路は見ゆれど、彌增す寒さは骨に徹りて手も足も凍る許。　一山寂寞として耳に答ふるものとては、閉ぢし氷の下潛る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響なんど、幽かに物凄く聞えて、怖ろしとも悲しとも譬へん樣なし。　斯かる難處と知りもせば、麓にて一夜を明ししものを、旅馴れぬ身の悲しさ。　足に任せて此の深山路へ掛りしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、後へも戻られず。　少年は進退谷まりて、半ば死せる者の如く、松の根方に打倒れ

饑・飢

ぬ。　起きも得上らず、しばし降る雪をうらめしげに眺めてありけるが、腹は次第に饑を感じて、寒さは一入身に沁みわたり、眠るともなく死ぬともなく、暫くは前後も知らずなりにけり。

懷かしの故郷や、藤太郎は昔覺えし山川草木を眼の前に見て、忽ち足の疲うち忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。　夜は漸く明けたれども、雪天の寒さに閉ぢられてや、道の家は未だ多く起出でず。　彼の家は我が友の家なりけり。　此の家には我れにやさしき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出でて、坐ろにあはれを催しつゝ須臾にして我が家の前に來れり。

崩萌　軌軌

見れば衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちて復昔日の觀に非ず。柱も傾ける所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ枝繁れり。修竹一叢思ふ儘に根を延ばして、彼方此方に生出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井の軌る音さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。姿は確かに母人なり。少年は忽ち胸塞がりぬ。昔は許多の男女を召使ひて、勝手などに出でられし事なき母樣が、此の雪の朝の寒天に、自ら車井の水を汲み給ふか、情なしと、湧出づる涙禁め敢へず。急ぎ車井の側に駈行きて、後よ

汲吸

叔父樣　祖父吉長を指す。藤樹は、父吉次早く歿したれば、大洲の祖父吉長に養はる。

り其の袂を引き、「母樣私が汲みませう。」と涙ながらに取縋る。事の不意なるに母は驚きて振返り、「誰れか、藤太郎、どうして此處へ。」藤太郎は細き聲、「はい、母樣の御手助を致しに參りました。先づ内へお入り遊ばせ、お頭髮へ雪が掛ります。」と孝子の眞情、片時も母を此の雪中に立たしめざらんとす。母は車井の綱を確と握りしまゝ石の如く立てり。「叔父樣とでも御一緒か。」「いえ、一人で御座います。」母は聲を勵ましし、「叔父樣が一人そなたをお出しなされたか。」「いえ、叔父樣には知らせずに參りました。」母は眉を揚げ、「怪しからぬ、何故そんな事を。さあお話しなさい、そなたが歸つた譯を。いえ、此處で聞きませう。聞かない内は滅多に家へは入れ

且旦

ません。」颯と吹きくる朝風に、地上の雪はくる〳〵と捲き揚げられて、横さまに二人の顔を撲つ。

藤太郎はありし次第を物語りぬ。母は我が子のやさしき心根に、すゞろに涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん、態と言葉を勵まして、「そなたは此の母の言葉を忘れましたか。そなたを叔父様に賴む時、一旦國を出たからは、天晴立派な人にならない内は、決して中途で歸るなと、あれ程堅く言ひきかせた事を忘れましたか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯そなたを立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居て手助をしてくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で來たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び逢ひません。其の足ですぐ大洲へお歸りなさい。」

大洲　愛媛縣喜多郡にある町。當時の城主は加藤貞泰といひ、吉長これに仕ふ。

迄（迠）

餘りの事に、藤太郎は默然として言葉も出でず、力拔けて雪の上に跪きぬ。母は其の失望せる樣子を見て、痛はしさ胸に滿ち、斯く迄我が身を思うて來りしものを、百里の道の一人旅、定めて憂き事も、辛き事も多かりしならん、せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲を休めさせんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにして思ひ直し、なまなかに弱き心を見せなば修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを。「そなたは母の言ふ事が解りませんか。」と强くは叱れど聲は沾みぬ。

叱（叱）

沾・霑

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ頭を垂れしまゝ、微かなる

聲にて「はい、解りました。」「それならば今から歸りますか。」藤太郎は悲しき聲「はい、歸ります。」と素直に言ふ。母は素直に答へられては、猶更腸の絞らるゝ思。遂に堪へ兼ねて忍び泣き、袖咬みしめて聲を飲む。

藤太郎は屹として立上れり。「母樣此の藥は皸の妙藥で、世にも得難き品、これ差上げたいと態々持つて參りました物。これだけはお取りなされて下され。」と新谷にて得し妙藥を差出す。母は快く「おゝそなたの志、これだけは受けませう。」と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとて上を向く。見合はす顏、互の眼には涙一杯。

母は恥かしと、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取落してうつ向けば、雪の上にほろ〳〵と落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心をはげまして、泣く〳〵我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。滿天の風雪路悠々。（近江聖人）

絞
咬
皸・皹
新谷　大洲町の北二里弱の地。
冰・氷
落合直文　仙臺の人、歌文を以て名あり、明治三十六年歿、年四十三。
瑞端

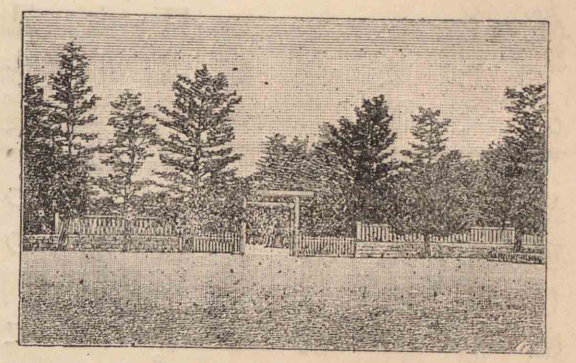
四　畝傍山

落合直文

畝傍山の東北の地、數町を卜して、瑞籬いと貴く結びめぐらしたるは、皇祖神武天皇の御陵なり。我等旅衣の塵うちはらひて御前に額づく。思ふ、むかし神武天皇、天祖の遺訓

概概

萩の家　落合直文の號



畝傍山陵

を奉じて此處に皇基を定め給ひしより、今に至るまで殆ど三千年、君臣の分明かに、父子の親厚く、世界にたぐひなき此の一大帝國を成し給へり。我等此の國に生れ、此の君の御流を奉じて、此の土に生育するもの、いかでか限なき感慨胸に溢れざらん。

をろがみ終りて友の詠める　池辺義象

古をしのぶ袂にかよひけり
畝傍の山のみねの松風

萩の家も暫し空うち眺めて、

陵稜

隴を得て蜀を望む　曹操曰、人苦レ無レ足、既得レ隴又望レ蜀。（魏志）

畏くも額づく袖にちりにけり
畝傍の山の松のしたつゆ

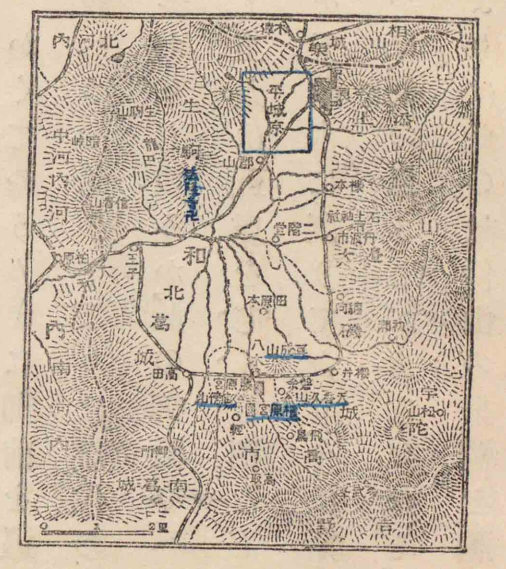
かくてやうくに御前を退く。そもくに中古以來王室衰へさせ給ひてよりは、歴代の帝陵さだかならざるものの多かりしのみか、此の御陵さへほとくに知られざるほどにて、里人は此處をじんむ田などと唱へ居たりとなん。さるを王政古に復りてより、今は斯くめでたくしなさせ給ひしかば、何の思ふこともなけれど、なほ隴を得て蜀を望む人情よりは、此の畝傍山の全體を悉く取入れて、瑞籬廣くゆひめぐらされたらんには、伊勢の神宮と相並びて、その尊さも一しほまさり、いかばかり神々しからんなど思ふも、愚なる心

長谷　奈良縣磯城郡

耳無山・天香具山　奈良縣磯城郡にあり、畝傍山と合せて大和三山といふ。

なりや。

それより綏靖・安寧二天皇の御陵を拜みて、長谷の方へと志す。耳無山・天香具山左右に見ゆ。古き物語などしのび出でて語り合ふに、いつしか談は今の世の憂き事などにも及びければ、萩の家、



畝傍山附近

うき事のまこと聞えぬものならば
すみても見まし耳なしの山

埴植

観音　大和長谷寺

昇仙峡　山梨縣西山梨郡荒川筋御嶽新道の奇勝。

市　甲府市。

夕日西にかたぶきて風やう〳〵すゞし。友、埴安の池のさゝなみよる見えて

あきかぜ立ちぬ天の香具山

夜になりて観音の前なる宿につきぬ。（萩の家遺稿）

五　昇仙峡

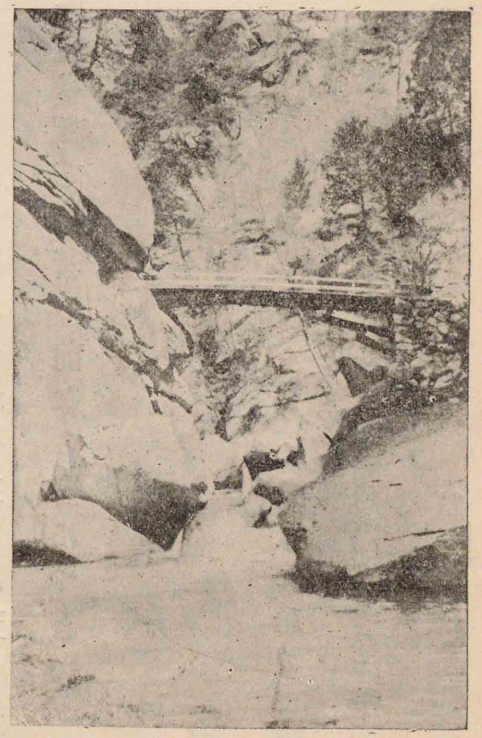
徳富蘆花

工場汽笛の響に眼ざめて東京に居るにやとふと疑ひしが顔を洗うて欄によれば天邊の高峰雪を帶びて山國の氣味眉に薄り候

今日は昇仙峡を見る積にて市のはづれまで車、それより昨日の疲れ足曳きずりて石ころ路を上り候

甲府より約二里にして天神森の茶屋あり西洋人夫を連れ銃を肩にして「此の邊に雉子が居ますか」と見事なる日本語にて茶屋の老婆に尋ね申候

茶屋を出でて程なく荒川の澁に出づこれより一里半ばかりが即ち御嶽新道の奇勝昇仙峽に候此の新道は御嶽の麓猪狩村の農長田圓右衛門と云へるが文化より天保にかけ自ら資を捐てゝ單身三十七年の星霜を費して作り上げたるものの由に候



昇仙峽

荒川　山梨縣の北境金峰山より發し南流して甲府の西を過ぎ笛吹川と合して富士川となる。

御嶽（みたけ）　荒川の峽谷に隆起す、修驗者の行場。

文化天保　德川將軍家齊の時代。

鋪（舗）

昇仙峽の妙は水にあり水晶を産する金峰山より出づる水なればにや清きこと眞に水晶の如く仙娥瀑となつては一點の汚なき雪をたぎらし一枚岩を走りては透明無色水無きが如く潭と淀みては黄葉の影を明かに數仞の底に鋪き眞に清冽を極め候昇仙峽の奇は石にあり石は皆花崗石薄紫の色をなして磊々として家の如く巨大なる卵の如く水中に横たはり或は危く道にさしかゝりて石門を作り或は一峰盡く此の石を疊んで累々蠹立せる覺圓峰の如きを作り候而して楓はなけれど黄葉錦の如く其の間を點綴す清奇の二字は昇仙峽を道ひ盡し候

仙娥瀑を過ぎ小隧道を過ぐれば即ち猪狩村、半里にして御嶽山金櫻神社あり甲府より此處まで四里に近し日猶高けれど

いたく疲れたれば、とある宿につきて名物の蕎麥を喫し國産の葡萄酒一杯を傾けて昏々として睡に落ち申候　（青蘆集）

口語

ます　ました
ました
ございます
ませぬ
ませう
有ります　有りました
ますから
ますが　ましたが
ますさうな

書翰文語

候
候ひき
御座候
候はず
候はん
これあり候
候間　候に付
候處
候由　候趣
候はば
候へば
候とも
候へども
候か　（「中等作文教本」に據る）

北原白秋
名は隆吉、福岡縣柳河町の人、詩歌に名あり。

ませうなら　ましたら
ますから
ませうとも
ますけれども
ますか

六　童謠三篇

北原白秋

里ごころ

笛や太鼓にさそはれて、
山の祭に來て見たが、
日暮はいや〳〵里こひし、
風吹きや木の葉の音ばかり。

かあさま戀しゝ泣いたれば、
どうでもねんねよお泊りよ。
しく〳〵お背戸に出て見れば、
空にはさむい茜雲、
雁、雁、棹になれ前になれ、
お迎へ頼むと言うておくれ。

若山牧水
名は繁、宮崎縣の人、歌人。
妻君も女流歌人

草鞋よ

草鞋よ、
お前もいよ〳〵切れるか、

若山牧水

西川勉
愛媛縣の人、詩人。

今日、昨日、一昨日、
これで三日はいて來た。
履き上手の私と、
出來のいゝお前と、
二人して越えて來た。
山川のあとを忍ぶに、
捨てられぬ思がする。
なつかしい草鞋よ。

電車の窓から

電車の窓から街を見た、

西川勉

蜜柑・金柑・梨・林檎、
毛布・襟巻・虎の皮。

自動電話の傍の、
白い煉瓦の交番に、
巡査がしょんぼり立つてゐた。

隣横丁の悪太郎、
靴屋の店の軒下に、
竹馬もたせて休んでた。

矢島鐘二
兵庫縣體育主事。
戰の幕
大正十年九月清水善造、米國フォーレストヒルの庭球デヴィスカップ戰に於て、米國選手チルデンと試合す。

電車が坂を降だる時、
屋根と屋根との間から、
富士の頭をちよいと見た。

七　美しき球

矢島鐘二

戰の幕は切つて落されました。こゝニューヨークを距る二十哩、理想的運動場として有名なるフォーレストヒルの清らかなグランドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな氣分

清水善造

が漂うてゐます。父たると母たると、老幼と男女とを問はず、世界各國の人が、ひしとばかりに鮨詰に、グランドの周に寄せ重なつて、この展開された場面に、兩選手の出場を待構へてゐました。チルデン君の上に幸福あれかしと祈る人の心と、清水君の上に優勝の幸せんことを祈る人の心とが、平和な光の中に照り映えてゐました。

この光の中に、この無聲の應援の中に、凜とした決意と慘憺たる苦衷とを想はせつゝ、微笑を浮べて、二人はテニスコートに現はれました。チルデン君は體重二十一貫、身長六尺二寸、清水君は五尺四寸五分の身長ですから、まるで大人に子供が向つたやうであります。觀覽席で異口同音に、「氣

清水君　名は善造、群馬縣笠懸町の人、三井物産會社員。

衷哀

の毒だが清水君は駄目だらう。」とさゝやくのが、清水君の耳に聞えました。

火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く龍虎の爭が始まりました。秒一秒、チルデン君と清水君との球が冴えて來ました。觀覽者は、かの球の動くがまゝに、その美しい碧緑の瞳の數々を、忙しさうに動かしてゐました。一心不亂に見入つて据ゑた瞳に、傷はしやチルデン君の、片足辷らして取亂した姿が映りました。米人は驚倒しました。躍氣となりました。この時です、清水君は、チルデン君の血走つた目許に、取亂した脚下に、柔かい程のよい球を送つてやりました。この瞬間の君の心には、優勝した時の名譽の感情

冴（冴）

躍瀧

態熊

も、自尊の精神も全く念頭にはありませんでした。

「ミスターシミヅ！」の歡呼の聲と共に、米人三萬の手が、林の如く一齊に振上げられました。あゝこの一事、清水君も清水君ですが、米人も米人であると思ひます。初めコートに出た時、チルデン君の眉宇の間には、清水君に對する侮蔑の情が、あり〳〵と見透かされましたので、心ある米人は、その態度に少からず不安の念を懷いたのであります。然るに清水君は、出場早々、この冷たい侮蔑に報ゆるに、温情春の如き球を以てしたのでありますから、その親切は電氣のやうに米人の胸にも響いて、感謝感激が心の底から湧上つたことでありませう。英人の如きは、清水君が永らく印度に

諠誼

上泉伊勢守　名は秀綱、上野箕輪の人、武藝者、神陰流の祖。

職を勤めてゐた關係もあり、日英同盟の情誼もあり、日本の應援者の少い關係も手傳つてでありませう、すつかり清水贔負になつて、盛に推奬しました。當時ニューヨークには群馬縣人が五十五人居りましたが、所謂上州長脇差の氣象から、この日は總動員で應援に參加してゐました。この敵味方總掛りの歡呼は、單なる妙技に發するのではなくして、その精神に對する力强い感激に發動してゐます。上泉伊勢守も定めし地下に感泣したでありませう。

時は一點一分を爭ふ時であります。五月・六月・七月・八月の四個月に亘り、十二個國の選手を薙倒して、最後の決勝に入つた時であります。若し今明二日間の米選手との競技

に於て勝を制するならば、日本開闢以來のデヴイスカツプを獲得する事の出來る時であります。　この時に於てチルデン君の心中を察して、同情の球を手元に送つた清水君は、實に偉いと思ひます。　而も清水君が「汝は汝にして汝にあらざる時」であり、日本を背負うて立つてゐる事を自覺して執つた自重自愛の態度は、實に敬服の外ありません。

人格の修養といつて、いきなりお釋迦樣や孔子樣の眞似をしようと思つても、私共にはなか〳〵むづかしい。　私共に取つて一番早い一番近路の修養法は、お互に親切同情を心がけ努める事であります。　錢を粗末に遣ふ人は、貧乏になつて生活に困る。　體を粗末にする人は、病氣になつて苦

釋譯

デヴイスカツプ　米國の富豪デヴイスが、各國選手の庭球競技に於ける優勝者に贈るを例とせる大型にして精巧なるカツプ。

しむ。　親切同情の精神を粗末にすれば、おしまひには人として困る事になります。」　時代は如何に推移しようとも、フオーレストヒルに現はれた清水善造君の運動道德の精神、貴く美しい球の精華は、蓋し不朽の光輝あるものと信じます。　今や歐米の人、否、世界の人が、清水君を慕うて已まないのは、誠に理の當然、情の自然であります。　（スポーツマンの精神）

信用ヲ失フカラ

フオーレストヒル　ニューヨークを距る二十哩理想的運動場と稱せらる。

歐米

伏見天皇　第九十二代。

八　心の修行

村井弦齋

伏見天皇の御代に、日本全國から刀工十八人を選び出して、おの〳〵一口づゝの刀を徵されたことがあつた。　その中で第一の選に當つた刀が天皇の御守になるといふのだ

から、諸國の刀工は皆畢生の腕を揮つてその刀を鍛へあげた。

當時日本一の刀鍛冶と、人も許し自らも誇つてゐたのは、越中の國松倉の人、郷義弘である。義弘は、當時刀打つ業では恐らく自分の右に出づる者はあるまい、自分こそ必ず第一の選にあづかるに相違ないと待ちかまへてゐたところ、思の外に、相州の正宗が第一といふ事に定められた。義弘はこれを聞いて、彼正宗は刀を打つよりも世わたりの方が上手で、賄賂でも遣つてこの僥倖を得たのであらう。よし、それならば、これから相州に赴いて、一刀に斬つて棄てようと、決死の勢で、越中の國からはる〳〵相州鎌倉へ出かけて

松倉　下新川郡松倉村、魚津港の南二里。

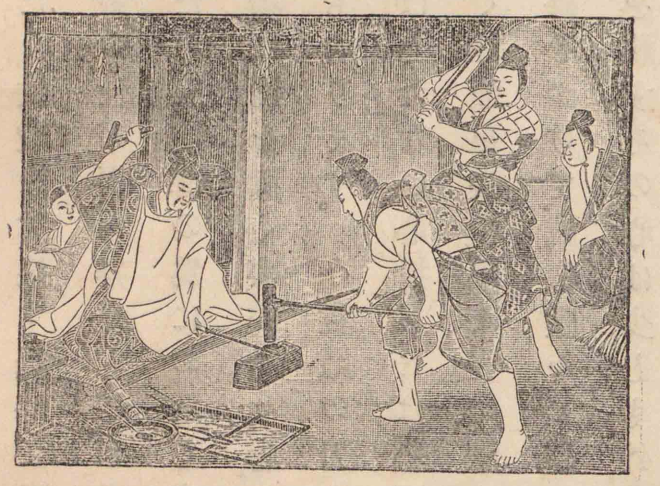
郷義弘　右馬允と稱す、約六三〇年前の人。

正宗　相模國鎌倉町雪の下に住す五郎入道と號す、約六百年前の人。

賄賂

槌鎚

往つた。



鍛刀の圖

義弘は正宗の家に着くと、丁度仕事場には鎚の音が聞えたので、まづその窓から中の樣子を覗つてゐたが、忽ち何を悟つたのか、今までの勢どこへやら、しを〳〵として玄關へ廻り、刺を通じて正宗に面會を求めた。正宗は有名な義弘と聞いて、すぐに迎へ入れた。義弘は初對面の挨拶を慇懃に述べて「さて正宗

懺（懺）　悔（悔）　祓（祓）　跋

殿、何を隱さう、自分は今日貴殿と腕くらべして、樣子によつたら貴殿を討果す覺悟で參つたところが、今よそながら貴殿の仕事振を拜見して、自分の遠く及ばない事を悟りましたから、懺悔の爲にお話し申す。一體自分は酒好きで、仕事場に酒を置く事があり、暑い時には兩肌脫いで刀を打つ事もあります。今貴殿の刀を打たれる樣を見ると、我が身のはしたない心掛けとは雲泥の相違、仕事場にはかう〳〵しく注連を張り、隅々まで祓ひ淨め、貴殿も弟子も折目正しい袴をつけて、威儀堂々と鎚を取られる。その眼は少しも外を視ず、その心は少しも外に散らず、身も魂もその刀に乘移るかと思ふばかり。それ程の丹誠を籠めてこそ、天下の名刀も打ち得られる事と感じ入りました。今まで腕一つで刀打つものと心得てゐたのは愧かしい。どうか今から貴殿の弟子として、心の修行をさせて下され。」と、懇ろに賴んだ。正宗は謙遜して一旦は斷つたけれども、義弘の熱心已み難いのを見て、遂に弟子にしたといふ事である。

（佛教）
吳音　懺悔　在鄕　下駄　大名　修行　正味　會得
漢音　後悔　故鄕　天下　名刀　孝行　正義　面會

九　鍛錬

河上肇

ジョン、スチユアート、ミルは、生れて甫めて二歲の時から、

河上肇　山口縣の人、法學博士、京都帝國大學教授。

ジョン、スチユアート、ミル
英國の哲學者。約五十年前歿、年六十八。

ジェームス、ミル
英國の哲學者、約九十年前歿、年六十四。

ルミ・トーアユチス・ショジ

早くも父の手許で學問を始め、三歳の頃からはギリシヤ語を學び、八歳の時には、更に第二外國語としてラテン語を學び、十三に達する頃には、既に經濟學をも一通りは學んでしまつて、略、今日の大學を卒業した位の學問をした人である。

かく言へば、ミルは非常な天才であつたかの如く思はれるが、決してさうでは無い。父ジエームス、ミルが思ひ切つて鍛錬をした結果である。父のミルは、あの有名な英領印度史を脱稿する前には、毎朝四時に起きて、夜は十二時に寢たと傳へられて居る。この努力主義をば、そのまゝ自分の

曜躍

子に應用したのである。かゝる父の下に教育せられた子供のミルは、生れてから、殆ど玩具といふものを持たせられたこともなく、子供の遊戯もせず、繪本なども父からは曾てあてがつて貰つたことが無い。日曜日でも、遊び癖が附くとよくないと云ふので、一日でも遊ばせられなかつたといふ事である。

ミルはかくの如き教育を受けた上に、獨立してからも非常な勉強をした人である。彼の平生の格言は「人の働けなくなる夜がもう來るぞ。」といふのであつたと傳へられてゐるが、げに彼は、何時死ぬかも知れぬ、生きて居る今日の中に働いておかねばならぬと云ふ考を、始終有つて居たものと

羅　羅

刃（刄）

春風を斬る　「電光影裏斬春風」（宋の祖元、元兵に斬られんとする時に述べし偈の句。）

思はれる。彼は三十三歳で肺病に罹り、四十八歳の時には遂に一方の肺を失つてしまつた程であつたけれども、六十歳で永眠するまで、殆ど一日の休もなく働いた。そして永眠前、死の床に在つて、「余は人事を盡したり。」この一句を吾々に遺し得たのであつた。

考へて見ると、同じ鐵でも、鍛錬すれば刀となり、更に十分に鍛錬すれば、遂に古今の名刀となる。相州物の刃の部分は、所謂刃金と皮金とを合せて、無慮八百四十萬七千四十枚ほどの鋼鐵を折重ねて鍛錬したものだと云ふ。同じ鋼鐵であつても、八百四十萬枚も折重ねるほどの鍛錬をすると、人を斬ること春風を斬るが如しといふ古今の名刀が出來

譬　譬

派　脈

これ聖　惟聖罔念作レ狂、惟狂克念作レ聖。（書經多方篇）

上るのである。繰返して言ふが、同じ鋼鐵である、たゞ鍛へに鍛へて、之を折重ねること八百四十萬枚にして始めて古今の名刀となる。人間も同じことである。同じ人間であるけれども、苦心努力、折重ねること八百四十萬枚に達すれば、如何なる人もそれ〴〵の方面に於て、必ず有爲の人物となり、世に交つて折れもせず、曲りもしない豪傑になり得るのである。相州傳の鍛刀法、これを人間に譬ふれば卽ち教育である。火に入れ水に入れ、折つては重ね、重ねてはまた延ばし、遂には八百何十萬枚も折重ねるほど、打つて〳〵打鍛へなければ、立派な人間は出來るものではない。

古人も「これ聖、念ふなければ狂と作り、これ狂、よく念へば

人十たびすれば　人一能之、己百之、人十能之、己千之。果能此道矣、雖愚必明、雖柔必強。（中庸）

聖と作る。」と言ひ、又「人一たびすれば己これを百たびし、人十たびすれば己これを千たびす。」とも言つて居るが、實に偉人が天下に名を成したのは、凡て非常な苦心と努力とを費し、驚くべき勉強と修養とを積んだ爲である。約言すれば、何れも非常な鍛錬を經た結果である。（社會問題管見）

鍛冶研磨幾百回。　霜鋒三尺玉無埃。
不疑日本刀銳利。　曾試盤根錯節來。（日本刀　大島圭介）
燒太刀はさやにをさめて丈夫の
心ますゝとぐべかりけり　（太刀歌　千種有功）

芳賀矢一　福井縣の人、文學博士、國學院大學長。

ミカドの帝國　日本滯在中の見聞記。

グリフィス　明治の初年日本御雇教師たりし人。

William Eliot griffis

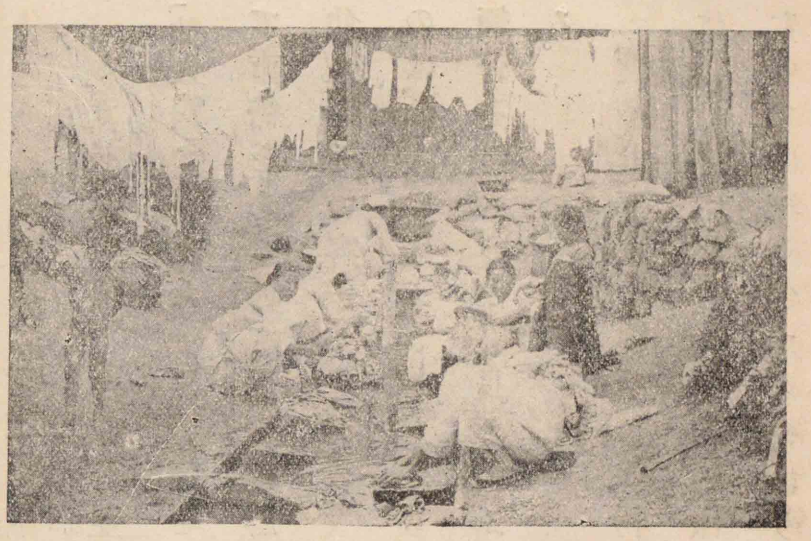
一〇　朝鮮雜觀

芳賀矢一

「ミカドの帝國」を書いた亞米利加人グリフイスは、朝鮮を「仙人國」と呼んだ。黑い冠をかぶり、白い衣を著て、悠然として、市街をあるいて居る朝鮮紳士の風采を望めば、如何にも仙人らしい容子が見える。人毎に長い煙管を携へて居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この長い煙管そのものが、優長といふ感を、一層强からしめるのである。

貴賤上下悉く純白な著物を纏うて、見渡す限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのでは無く、冬でもやはり同じである。これには、一つの

傚・倣



洗濯

傳說があつて、昔ある王樣が、父王の死を悲んで、始終喪服を著けて居られたので、人民が皆これに傚つたのだといふ。一應聞けば、尤らしい殊勝な話であるが、この傳說は無論作り事であらうと思ふ。何處の國でも、古い時代には眞白な著物が流行つたが、その中に色々の染色や、縞や、飛白の衣裳が行はれた。文化

拘(拘)

の他の方面が種々に變化を受けたにも拘らず、純白の衣服が數千年の後までも行はれて居るのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端、支那を崇拜した國として、この國俗を變へなかつたことも、考へれば面白い事である。

子供は折々桃色や、萌黃や、藍色の著物を著て居る。それも全部同じ色で、日本の女の子のやうに、美しい花紅葉の染模樣ではない。婦人もまゝ、紅色・萌黃色の衣を著けて居るが、模樣や縞は少しも無い。殊に婦人が長衣といつて、我がかつぎのやうなものを著て、目ばかり出してあるいて居るのは、日本の古代の風俗その儘で、服制に多少の相違こそあれ、大體に於いて古い繪卷物を見るやうな心地がする。低

い屋根の下で眞桑瓜などを食つて居る容子は、何處となく今昔物語をまのあたりに見るやうである。現在の生活に於て、朝鮮人が、優長といふばかりではなく、朝鮮の歴史そのものが優長で、今でも、やはりそろ〳〵と、昔の歴史が流れて行くのではないかと思はれる。

今昔物語　源隆國の著といふ、和漢古今の傳説を書きあつめたる書、六十卷。

衣冠を正しくすることは、慥かに朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも滅多に肌を露はすことはない。これは寒い氣候の關係から、自然、習慣となつた所以もあるかも知れぬが、どこにかく素肌を人前には出さない。支那の勞働者も身體の上部こそあらはせ、腰から下は出さないが、朝鮮人で肌を脱いで居るのは、終に一人も見なかつた。

賤（賤）

朝鮮人は雨具を用ひぬといふことは、かねて聞いて居つた。今は田舍でも、蝙蝠傘を手にしてあるいて居る人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に小さな傘を載せて居ることである。竹の骨で、油紙を張つたものである。成程日本の傘は、これを大きくしたものだなと感服した。又頭に雲水坊主のかぶるやうな、深笠の大きいのをかぶつてあるいて居るのが往々ある。あれは何かと聞けば喪中の人で、喪中は一年二年三年、必ず常にあの笠を著けて居るといふ。如何さま舊い禮儀はやかましい處だ。朝鮮・支那・土耳其、皆それぞれの冠り物を今にも

舊（舊・旧）

保存して居る。日本人は古い物を保存して居るが、新しいものは又何でも用ひる。洋服に下駄も履き、紋付の羽織にシルクハツトもかぶる。

シルクハツト Silk-hat

背脊

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背で、女は頭である。男の背には、例の支繋（ちげ）といふものをかけて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡

薪賣り

大原女　京都の北八瀬大原邊より、京都に物賣に來る女子をいふ。

梯悌涕

瓜を賣るのにも、背に負うて來るので、日本のやうに天秤棒で、兩端に擔ぐことは無い。すべてが、山に柴刈に行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でも何でも、頭に載せて行くので、これは京都の大原女式である。しかし大原女のやうに、張板や、梯子などをかついであるくのは見受けなかつた。

朝鮮には虎が居る。竹に虎といふから、竹も澤山ありさうに思ふが竹は少い。これは氣候のせいである。竹の簾や、扇子や、竹細工も、いくらかあるが、概して、日本のやうに、竹を種々の工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹眞二つ割で天秤棒の代にしたり、竹で船を作つたりして居るが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を

縄（繩）

諸緒

干してあるのを見ると、大抵縄にかけ渡してある。又田舍などでは、丘の上にひろげて竝べてあるだけである。桶・盥のやうなものにも竹の箍（たが）は無い。竹の無い所へ行くと、今更に竹の效用の廣いのに驚かれる。

水道栓の側で水を汲んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空函を用ひて居る。如何にも貧乏げにあはれに見える。瓢簞をたち割つたものが、水を汲む杓子であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、日本のやうな下駄・足駄（アシダ）は見當らぬ。靴の下に、足駄の齒のついたものはあるが、鼻緒を立てゝ、その鼻緒を、足の指にはさんで歩く

葺葺

といふ藝當は、日本人より外には出來ぬのであらう。

朝鮮の家は、如何にも低くて、むさくるしく見える。京城には、さすがに瓦葺の家も見えるが、田舍は殆ど藁屋ばかり、その藁の葺方が、日本の如く綺麗に端をそいでない爲、たゞ藁を打ちかけたやうに、如何にもきたなく見えて、遠くから見れば豚小屋の樣にしか見えぬ。寒さを恐れるため、窓が少ないから陰氣で、日本の田舍家のやうにからりとして居らぬ。日本のは、小さくてもきたなくても、からりとおつ開いて居る。あれでは、夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから、割合に涼しいとのこと。床は土で、その下が溫突（をんぐる）で、冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には、

二階建・三階建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低い。地に這つて居るやうである。また家をあまり立派にすれば、金持と認められて、すぐに取立てられるから、金持でも、わざと外觀を汚くして居たやうな原因もあらう。併合後、新築する鮮人の家には、段々と、二階造の高いのも出來るさうである。

汚・汙
併（併）

それに比べれば、王宮は比較にならぬ程、規模も大きいし立派である。就中、さきの王宮景福宮は、大院君の造營せられた宮殿で、幾多の宮殿・樓閣が相連つて廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧みず、人頭稅までも課して造り上げたといふ。いはゆる、民の膏血を絞つて築いたので、この宮殿が即ち李朝に崇つたのだといはれて居る。

景福宮
京城北漢山麓に在り、明治三年に成る。

大院君
名は李昰應。李瑀大王の生父。明治三十一年薨。年七十九。

崇

昌德宮
京城北漢山麓に在り、大正六年十一月燒失す。

ソーファ
Sofa

飛流三百尺
飛流三百尺。遙落九天來。疑是白虹起。翻成萬壑雷。（昌德宮祕苑碑）

大院君

この宮の正門興化門前の通などは、幅六十間、東京にも滅多にない。現王宮昌德宮も拜觀したが、これは近世の洋風に塗替へ、西洋の椅子、ソーファなどがあつて面目が改まつて居る。建築には、丹碧を塗附けてあるばかりで、材木の削り方、仕上方は、日本のやうに立派でない。一體に樹木の少い京城に、昌德宮の裏の祕苑だけは、流石に老樹が生ひ茂つて居る。併し何等林泉の美とてはない。小さい溪流の石に題した句に「飛流三百尺、遙落九

天ニ來ル」とあるのには驚いた。

朝鮮人は怠惰で、勞働を嫌ふといふが、農業に精を出して働いて居るのを見ても、決してなまけるばかりの人間ではない。朝鮮の山を禿山にしたのも、朝鮮の家屋を豚小屋のやうにしたのも、乃至は、長煙管をくはへて、悠然として南山を見て居る白衣の民を作つたのも、皆古來の惡政の罪である。

苛政は眞に虎よりも猛である。憫むべき我が一千萬の新同胞は、今や仙人の生活を次第に離れて、嬉々として我が聖天子の德澤に霑ひつゝあるのである。

悠然として　陶淵明の詩の句「採ニ菊東籬下一、悠然見ニ南山一。」

苛政は　禮記「苛政猛ニ於虎一。」

苛荷

夏目漱石　名は金之助、東京の人、文學者、大正五年歿、年五十。

熊岳城　南滿洲鐵道本線の一驛。東南半里に熊岳城溫泉あり。

柳抑

一一　滿洲の野

夏目漱石

夏目漱石

余は切ない思をして、汽車の時間に間にあふやうに句を案じた。句が浮ぶや否や記念帳の第三頁へ「熊岳城にて」と前書をして、

黍遠し河原の風呂へ渡る人

と認めて、吻と一息吐いた。

さうして、宿の主婦の禮を受ける暇もないほど急いでトロに乘つた。電話の柱に柳の幹を使つたのが、何時の間にか根を張つて、針金の傍から青い

葉を出して居るのに氣がついて、あれでも句にすればよかつたと思つた。

停車場から汽車に乘つて、窓から覗いて見ると、もはや高粱がなくなつてゐる。先刻までは遠くの方に、黃色の屋根が處々眺められたが、それも竟に消えてしまつた。

「あれは、玉蜀黍が干してあるのだ。」

と說明せられたので、漸くさうかと想像し得た程、玉蜀黍を離れて余の頭に映つた。朝鮮では同じく屋根の上に蕃椒を干してゐた。松の間から見える一つ家が、秋の空の下で燃え立つやうに赤かつた。しかし、それが蕃椒であるといふことだけは、一目ですぐ分つた。滿洲の屋根は距離が遠

梁梁　洲州

い所爲か、唯、茫漠たる單調を破るための色彩としか思はれなかつた。處が、その屋根も高粱も悉く影を隱して、あるものは、たゞの地面だけになつた。

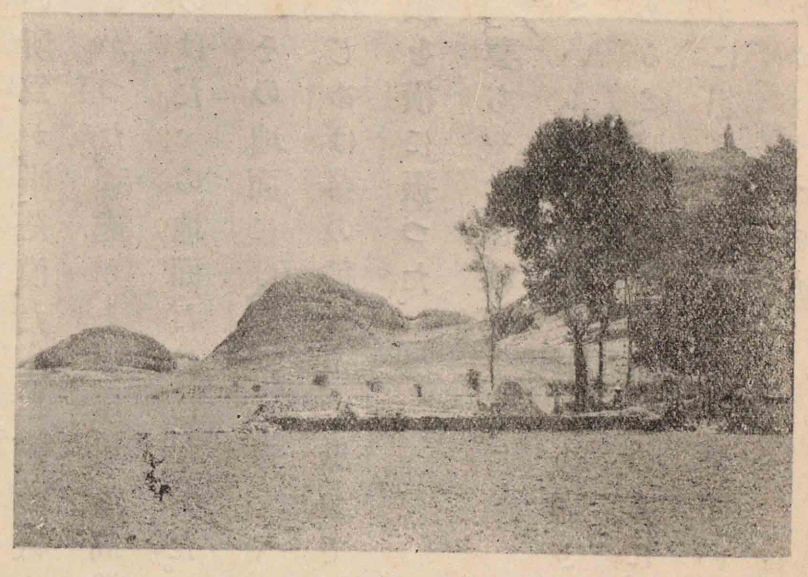
その地面には、赤黑い茨のやうな草が限なく生えてゐる。はじめは蓼の種類かと思つて聞いてみると、同行者はすぐ頭を横に振つた。

「蓼ぢやない、海草だよ。」

といふ。なるほど、平原の盡きる邊を、眼を細くして見きはめると、暗くなつた遠くの方に、一筋鈍く光るものがあるやうに想はれる。「海邊かな。」と聞いてみた。その時、日はもう暮れかゝつてゐた。

隱(隱)　鈍純

却卸



滿洲風景

際限もなく蔓つてゐる赤い草の彼方は、薄い靄に包まれて、いくらか蒼くなりかけた頃である。あからさまに眼に映るすぐ傍をよく〳〵見詰めると、乾いた土ではない。踏めば靴の底が濡れさうに、水氣を含んでゐる。同行者は、

「鹹氣があるから、穀物の種が卸せないのだ。」

といつた。

「豚も出ないやうだね。」

と、余は聞き返した。

汽車に乘つて、始めて滿洲の豚を見た時は、實際一種の怪物に出會つたやうな心持がした。「あの黑い妙な動物は何だ。」と眞面目に質問したくらゐ、異な感じに襲はれた。それ以來、滿洲の豚と怪物とは、離せないやうになつた。この薄暗い、苔のやうに短い草ばかりの不毛の澤地の何處かに、あの怪物は屹度點綴されるに違ひないといふ氣が、なか〳〵拔けなかつた。

しかし、一匹の怪物にも出會はぬ前に、日は全く暮れてし

まつた。目に餘る赤黑い草の影は、次第に一色の夜に變化した。唯、北の方の空に、夕日の名殘のやうな明るい處が殘つたのである。さうして、その明るい雲の下が目立つて黑く見える。恰も高い城壁の影が、空を遮つて長く續いてゐるやうである。余は、高いこの影を眺めて何時の間にか、「萬里の長城に似た古跡の傍でも通るのだらう。」ぐらゐの空想を逞しうしてゐた。すると、誰だか、この城壁の上を驅けてゆくものがある。「はてな。」と思つて霎時する中に、又、誰か驅けてゆく。どう考へても、人が通るに違ひない。無論夜のことだから、どんな顏のどんな身裝の人かは判然しないが、比較的明かな空を背景にして、黑い影法師が規則正しく壁

驅（駈・駆）

の上を驅拔けることは確かである。余は同行者の意見を問ふ暇もない程面白くなつて、一所懸命に、眼前を往來するこの黑い人間を眺めてゐた。

同時に、汽車は刻々城壁に向つて近寄つて來た。それが一定の距離まで來ると、俄然として失笑した。今まで、慥かに人間だと思ひこんでゐたものは、急に電信柱の頭に變化した。城壁らしく横長に續いてゐたのは、大きな雲であつた。汽車は容赦なく電信柱を追越した。高い所で動くものが、漸く眼底を拂つた。（滿韓ところ〴〵）

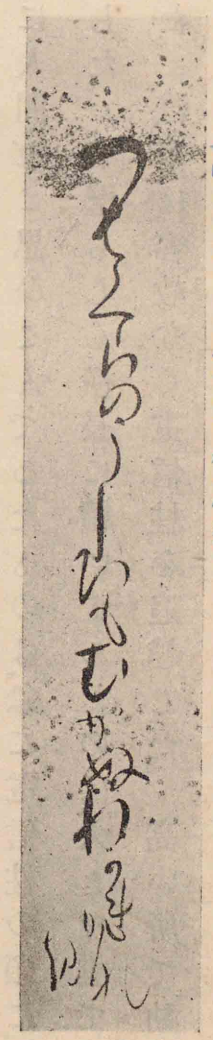
禮儀〔禮義〕　規模〔規模〕　模樣〔摸樣〕
獨得〔獨特〕　記念〔紀念〕　神髓〔眞髓〕

正岡子規
名は常規、松山市の人、俳人、明治三十五年歿、年三十六。
俳諧大要
俳句問答
子規隨筆
竹の里歌集

一二　病床放語

正岡子規

毎朝繃帶の取換をするに多少の痛みを感ずるのが厭でならぬから、必ず新聞か雜誌か何かを讀んで、痛さを紛らかしてゐる。痛みが烈しい時は新聞をにらんでゐるけれど、何を讀んでゐるのか少しもわからないやうな事もあるが、又新聞の方が面白い時は、いつの間にか時間が經過してゐることもある。



子規筆蹟

それで思ひ出したが、昔、關羽の繪を見たのに、關羽が片手に外科の手術を受けながら本を讀んでゐたので、手術も痛いであらうに平氣で本を讀んで居るところを見ると、關羽は馬鹿に強い人だと、子供心にひどく感心してゐたのであつた。なアに今考へて見ると、關羽も矢張り讀書でもつて痛さをごまかしてゐたのに違ひない。

根岸
東京市下谷區。

余は閻魔大王の構へて居る卓子の下に立つて、「お願でございまする。」といふと、閻魔は耳を劈くやうな聲で、「何だ」と答へた。そこで私は根岸の病人なにがしであるが、最早御廳よりの御迎が來るだらうと待つて居ても、一向に來ぬのは何うしたものだらうか、來るなら何時來るであらうか、それ

汗汗

を聞きに來たのである、と譯を話して丁寧に賴んだ。すると閻魔は、いやさうな顏もせず、直に明治三十四年と五年の帳面を調べたが、そんな名は見當らぬといふ事で、閻魔先生少しやつきになつて、珠數玉のやうな汗を流して調べた結果、その名前は既に明治三十年の五月の帳消になつてゐるといふ事がわかつた。それからその時の迎へに行つたのは、五號の青鬼であるといふことも書いてあるので、その青鬼を呼んで聞いて見ると、「その時迎へに行つたのは自分であるが、根岸の道は曲りくねつてをるので、到頭家がわからないで引返して來たのだ。」といふ答であつた。次に再度の迎へに行つたといふ十一號の赤鬼を呼出して聞いて見る

鶯横町　子規の居住せしところ。

幅副

と、「成程その時行つたことは行つたが、鶯横町といふ立札の處まで來ると、町幅が狹くて火の車が通らぬから、引返した。」といふ答である。之を聞いた閻王は甚だ當惑顏に見えたので、傍から地藏樣が「それでは事のついでにもう十年ばかり壽命を延べてやりなさい、この地藏の顏にめんじて。」などとしやべり出された。余はあわてて、「滅相な事仰しやりますな。病氣なしの十年延命なら誰しもいやはございません。この頃の樣に痛み通されては、一日も早くお迎の來るのを待つて居る許りでございます。この上十年も苦しめられては遣瀨がございません。」閻王は直に余に同情を寄せたらしく、「それなら今夜すぐ迎へをやろ。」といはれたので、

一寸驚いた。「今夜は餘り早うございますな。」「それでは明日の晩か。」「そんな意地の悪い事をいはずに、いつともなく突然來て貰ひたいものですな。」閻王はせゝら笑して、「宜しい、それでは突然とやるよ。併し突然といふ中には今夜も含まれて居るといふ事は承知してゐて貰ひたい。」「閻魔樣、そんなにおどかしちや困りますよ。」閻王から〳〵と笑つて、「こいつなか〳〵我儘ッ子ぢやわい。」

（子規隨筆）

高濱虛子　名は清、松山市の人、俳人。

一三　漱石と子規

（自修文）　高濱虛子

私が、漱石氏について一番古い記憶は、その大學の帽子を被つてゐる姿である。時は明治二十四五年の頃で、場所は松山の中の川に沿うた古い家の一室である。それは、子規居士が歸省してゐた時のことで、その席上には和服姿の居士と、大學の制服の膝をキチンと折つて坐つた若い人と、居士の母堂と、私とがあつた。母堂の手によつて、松山鮓と呼ばれてゐる所の五目鮓がこしらへられて、其の大學生と居士と私との三人がそれを食べた。他の二人の眼から見たら、その頃まだ中學生であつた私は、ほんの子供であつたであらう。又十七八の私の眼から見た二人の大學生は、遙かに大人びた文學者としてながめられた。そのころ、漱石氏は、どうして松山に來たのであつたらうか。それは其の後しば〳〵氏に會しながらも、終に尋ねて見る機會がなかつた。矢張休みを利用してこの地方へ來たついでに、歸省中の居士を訪ねて來たものであつたらうか。その席上ではどんな話があつたか、全く私の記憶には殘つて居らぬ。たゞ何事も放膽的であるやうに見えた子規居士

漱（嗽）

放膽的　思ひ切つて大膽に物事をする方であること。

と反對に、「極めてつゝましやかに紳士的な態度を取つてゐた漱石氏の模樣が、昨日の出來事の如くはつきりと眼に殘つてゐる。漱石氏は洋服の膝を正しく折つて靜坐して、松山鮓の皿を取上げて一粒もこぼさぬやうに、行儀正しくそれを食べるのであつた。さうして子規居士はと見ると、和服姿にあぐらをかいて、ぞんざいな樣子で箸をとるのであつた。それから兩君は、どういふやうにして、どういふ風に別れたか、それも全く記憶にない。たゞその時、私は一本の傘を居士の家に忘れて歸つて來たこと、その次に居士を訪問して見ると、赤や綠や黃や靑やの詩箋に、二十句ばかりの俳句が記されてあつたのを、居士が私に見せ、「これがこの間來た夏目の俳句だ」と言つたことを覺えてゐる。どんな句があつたか記憶しないが、何でも一番最初に書いてあつた句が鶯の句であつたことだけは記憶してゐる。（漱石氏と私）

著　著

詩箋　漢詩を記すに用ふる紙、種種の模樣又は染色あるもの。

俳　徘

含（含）

坪內逍遙　愛知縣の人、名は雄藏、文學博士、早稻田大學教授、明治大正に於ける文壇の大家。

ものも言はで食ひついたる西瓜哉　子規

たゝかれて晝の蚊を吐く木魚かな　漱石

餘り長き晝寢なりけりと起されぬ　虛子

一四　眞の勇氣

坪內逍遙

坪內逍遙

「楯を抱いて歸れ。然らざれば楯に載せられて歸れ。」とは、昔スパルタ國の母親等が、其の子等の軍に出づる時常に言含めし言葉なりこそ。

戰國に生れたる者は、死ぬることを恐れずして、卑怯と言はるゝことを恥ぢたりき。

昔は勇敢の氣象を貴ぶこと今に倍せり。男は十四五歲にして戰場に出でし例幾らもあり。日本武尊は十六歲にて熊襲を誅し給ひ、爲朝は十八歲にて九州を徇へたり。只昔の勇氣は、腕力と殺伐とを伴ふを例とす。今いふ勇氣は其の意味廣し。

戰國の武士山中鹿之助は、大勇士とならんと志して、七難八苦に遭はしめ給へ。」と常に神に祈りたりといふ。又或人は、

憂き事のなほこの上に積れかし

恥(耻)

山中鹿之助　名は幸盛。戰國時代尼子氏の臣。天正六年(約三五〇年前)歿、年三十六。

かぎりある身の力ためさん

と詠みたりき。何にてもあれ、苦しきこと、怖ろしきものの、折重りて攻寄するを怖るゝ心無きが勇氣なり。

只怖ろしき苦しさを忍ぶばかりのことは、女も爲し得る所なれど、進み戰ひてこれに打克つは、男ならでは爲し易からず。腕力は生まれつきにも由ることなれば、乏しきも是非なし。勇氣なきは男子にあらず。されど勇氣にも階級あり。弱き者を苦しむるは勇に似て勇にあらず。

我が腕力を賴み、又は多勢の後援を賴みて、妄に我意を張りて人と爭ふことを好むが如き、又は何の思慮準備も無くして、危きことを試みるが如きも、盲人の蛇におぢざる類な

援煖

り。これを向う見ずと言ひ、粗暴と呼ぶ。即ち暴虎馮河の勇なり。眞の勇氣にあらず。

眞の勇者は、我が善しと信じたることの爲にのみ戰はんと欲す。故に輕々しく危きに近づかず。されど一たび其の事に當りては、命をも惜しまぬなり。或は單身にして惡人を取挫ぎ、或は弱者を救ふ。人の知ると知らざると、援くると援けざるとは問ふ所にあらず。つまり勇氣を見せびらかさぬが眞勇の證據なり。茶坊主に辱められて爭はざりし木村重成の優しさ、油つぐ老僧を手捕りにせし平忠盛が思慮沈着など、好き例なり。

同じく眞勇といふうちにも、文明の今日は、十年、二十年引續きて艱難と戰ひ、奸曲を取挫き、幾たび敗れても屈することなく、斃れて後已む勇氣をこそ養ふべきなれ。（中學修身訓）

輕（輕・輕）

據（拠）

木村重成　豐臣秀頼の臣、元和元年（約三一〇年前）陣歿、年二十三。

平忠盛　平清盛の父、仁平三年（約七七〇年）歿、年五十八。

奸・姦

大勇　小勇　武勇　沈勇　剛勇　義勇　蠻勇　匹夫勇

勇往邁進　勇猛精進　勇決果斷　勇退高踏

一五　加藤清正の大度

岡谷繁實

加藤清正、一日放鷹に出づ。樹蔭より誰とも知らぬ大の男走り出で、刀を拔きて駕籠の眞中を突通す。清正昨宵の酒に草臥れ、後に寄りかゝりて微睡し居たりしかば、身に當らず。駕籠側の者驚きて、右の男を搦め捕る。

岡谷繁實　群馬縣館林の人、勤王家、大正六年歿、年九十。

糾・糾

加藤清正

清正、駕籠を据ゑさせ、「何者なるぞ、狼藉なり。」と尋ねしに、「某は所もなく、苗字もなく、親も子もなく、國右衞門と申す者なり。」と答ふ。　仔細を嚴しく糺すに、「元來、棄子にて人となりし故、親兄弟も知り候はず。　たゞ「一門加藤清正の爲に亡ぼされたり。」と聞傳ふるばかりなり。　然れば、いつかは清正を討つて仇を報ぜんと、年來狙ひ廻れども、御威勢に壓されて空しく月日を送れり。　此の節を幸に一太刀と思ひ込みけれども、御運に負けて本意を遂げず、無念千萬、言語道斷なり。　早々首を刎ねらるべし。」といふ。

翻・飜

卑（卑・卑）

清正聞いて「あつぱれ、肝に毛の生えたる曲者かな。　汝が一命を助くべし。　一念を翻し、清正が家來になれ。」と言ふ。　國右衞門曰く、「忝き仰なれども、御請け罷成らず候。　其の故は、一旦御恩を存じ御奉公仕るとも、數年存じ込んだる念力なれば、逆心を存すべきは必定に候。　然れば早く死を賜ひ候へ。」と望む。　其の時、清正大音あげ、兩眼に角を立て、「おのれ今までは大剛の者と思ひしに、卑怯千萬の臆病者なり。」と叱りければ、國右衞門切齒をなし、「臆病とは是非なきこと。」と立上る。　清正「汝、最前一命を棄てしに非ずや。　實に一命を棄てたらば、舊染の念は殘すべからず。　棄てざる所を臆病とは言ふなり。」といひし時、國右衞門落涙し、「有難き御一言に、忽

ち一念晴れて候。御家來に罷成り、御恩を報ずべし。」といふ。清正喜び、駕籠より下り、「これより徒歩にて行くべし。國右衛門、刀持て。」と、腰の物を渡し、終日放鷹しけり。

其の後、彌、側を離さず、段々祿を與へ、懇ろに召使ふ。國右衛門その恩に感じ、蔚山の城にて勇しき戰死を遂げけり。

（名將言行錄）

蔚山　朝鮮慶尙道東北海岸、慶長二年清正ここに籠る。

大町桂月　名は芳衛、高知縣の人、文章家。

一六　八道の山

大町桂月

八道の山よ、いざさらば、
年のなゝとせ戈とりて、
踏荒したる日の本の
ものゝふは今歸るなり。

八道　京畿、忠淸、全羅、慶尙、江原、咸鏡、平安、黃海。

釜山の浦の秋ふけて、
空もしぐるゝ夕まぐれ、
波路はるかに帆を上げて、
汝とはとはに別るべし。

恨も深き「ありなれ」の
川の流ともろともに
望は逝きぬ。いざさらば、
八道の山よ、つゝがなく。

知遇の恩に身を捨てて、

四百餘州をわが駒の
蹄に蹴んと勇みしも、
さめて果敢なき夢なれや。

我を知りにし太閤の
世に亡き後は、たがために、
千里の外に戈とりて、
異境の山に戰はん。

恥を忍びて故郷に
歸るも後に死なんため、
主君の家の行末を

世嗣の主　豐臣秀頼。
石田・小西　石田三成、小西行長。

思へば重き命なり。

あはれ太閤世を去りて、
世嗣の主はいとけなし。
石田・小西の小人ばら
必ず事を誤らん。

孤に似たる家康の
爭でかたゞに黙すべき。
やがて、六尺の我がからだ、
棄てて甲斐ある時は來ん。

わが幼時よりはぐくまれ、
恵を受けし豊臣の
家を守りて死なん身の、
永くは住まじ、世の中に。

跡に見捨つるものゝふの
亡き魂(タマ)もしも知るあらば、
三途(ズ)の川や六道の
辻に暫くわれを待て。

これを限の見をさめに
今一度と見かへれば、

山路愛山　名は彌吉、静岡縣の人、評論家、大正六年歿、年五十四。

赤穂　兵庫縣赤穂郡城主は淺野内匠頭長矩。五万三千石

波音凄く雨あれて、
野山は霧におぼろなり。

八道の山よ、いざさらば、
國の譽と戰ひて、
花と散りにし日の本の
男子(オーコ)の骨を護れよや。

（黄菊白菊）

一七　大石良雄

山路愛山

赤穂の城下は早馬の爲に大騒となりぬ。
江戸城中刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門・茅野三

江戸城中の刃傷　元祿十四年三月十四日長矩吉良義央を江戸城中に傷つく。

早水藤左衛門　名は滿堯、時に年二十八。

茅野三平　名は常成、時に年二十八。

大石良雄　時に年四十四。

長矩　淺野内匠頭、時に年三十五。

原惣右衛門　名は元辰、時に年五十五。

大石瀨左衛門　名は信清、時に年二十六。

平は直ちに馬に跨りて日に行くこと三十里、五日にして赤穗に達し、變を國老大石良雄に報じたり。長矩自盡の命下るや、原惣右衛門・大石瀨左衛門は更に同じ早さを以て赤穗に達したり。

君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たぐふ者なく、而も温厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼れは、衆人に驚異せられぬ。

赤穗城中の會議は開かれたり。事情は愈〻明白になりぬ。大野黨と大石黨とは隱然として分れぬ。

大野九郎兵衛　名は知房。

班　班

長廣　長矩と三歳ちがひ。

大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穗の家老にして、班は良雄の下に在りしが、長矩に寵用せられ、かつ年老いて事に慣れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は專ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、成るべく温和に城を明渡さんことを主張せり。然れども血氣にはやる藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり「まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめんことを幕府に請ふべし。」と。

越えて二日、城中の會議は復開かれたり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の説

大垣　今の大垣市。城主戸田采女正は長矩母方の從弟。

四月十三日　元祿十四年。

殉徇

に左袒せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。四月十三日大野は遂に遁逃せり。人は減ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の說を執れり。復讐の說は勝てり。血判に與る者百十餘人、其の中江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。

道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日赤穗城の上より、受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。

山科　山城國宇治郡。京都大津間。

上杉氏　羽前國米澤侯。吉良家の親戚。

吉良氏　名は義央、德川幕府の高家。

城中より城外へ使者は往返せり。翌日城は難無く明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穗藩士の餘りに温和なるに驚きたり。

良雄は京都の山科に住して優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて永住を粧へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに努め、人を遣はして吉良氏の邸を守らしめ、且其の采邑の人に非ざれば婢僕に用ふること無からしめき。是を以て吉良氏の事

三月十五日　元祿十五年、前年同日は長矩自刄の日。

華岳寺（ケガクジ）　曹洞宗、淺野家の菩提寺。

四條河原　京都鴨川の河原、四條大橋附近の稱。

吉田兼亮　通稱忠左衞門。一黨の古老にして、良雄に代りて江戸に在る同志の統領たりき。この時年六十二。

情を探るは極めて難かりき。

年は暮れぬ。記憶すべき三月十五日は再び來りぬ。赤穗の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し、鶯は老いて四條河原の夕涼に都の群衆雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國奴、破廉恥の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。而も彼は恬として關り知らざるものの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來る。曰ふ、「七月十八日長廣藝州に預けられたり。」と。一縷の望は絶えぬ。此の時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に因りて君家の或は再興せらんれこと

妻　名は陸女。

石束氏　陸女の父石束源兵衞、但馬豐岡藩の家老

良金　通稱主稅、この時年十五。

本所の邸　江戸本所松阪町、今の國技館附近。

麻布の別邸　江戸麻布我善坊、今德川侯邸の一部。

を希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、また復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等に其の眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。此の年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

吉良氏の防衞は猶密なりき。彼は其の本所の邸を以て卑濕なりとし、之を修補するまで、麻布なる上杉氏の別邸に住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に

賭堵

池上　今は神奈川縣橘樹郡御幸村に屬し、下平間、上平間の二字に分る。

急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。而も良雄は聽かざりき。

良雄父子は直ちに江戸に入ることを敢てせざりき。彼はまづ池上の平間村にありて、吉良氏の動靜を覘ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵衞、同佐内と名乘りぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて、吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年は之を窺へり。彼等は何處より來り、何處へ去るを知らず。五更に至つて、他の一隊と交代せり。さすがの吉良氏も之に氣付かざりき。しかも間諜、探偵すべて効を奏せず、祕密は却つて吉良家に出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は卽ち定まりぬ。

横川宗利　通稱勘平、この時年三十六。

長澄　備後國三次城主、長矩の室の實家。

瑤泉院夫人　名は阿久里、淺野長治の女。

大石良雄筆蹟（赤穂を去るに臨み書き て從僕に與へしもの）

十二月十三日に至つて、良雄は率然淺野長澄の邸に至りて、長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して其の餘剩を還せり。しかもかの一事は猶祕し

て語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、「取る物も取敢へず、走り還つて夫人に告げたり。夫人は少しも驚かず、徐ろに問へり、「仇人は誰にして、其の死生は如何。」と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人は曰へり、「更に登城して後、再びわれを訪はれよ。兄死して、弟たる者仇の存亡を知らざる事やはある。」と。かくて夫人は終身長廣に會はざりき。

央史

翌十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。

泉岳寺　芝高輪車町。臨濟宗。

此の夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集まれり。火事裝束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍め

り。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞ゐたり。既にして再び笛は鳴れり。火事裝束せる四十七個の人物は吉良邸を出去れり。夜景は初の寂寥に返れり。

雪霽れて、夜も亦明けたり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして行列を急げり。忽ち聞く、路人の喧嘈なるを。始めて知り

義士討入の圖

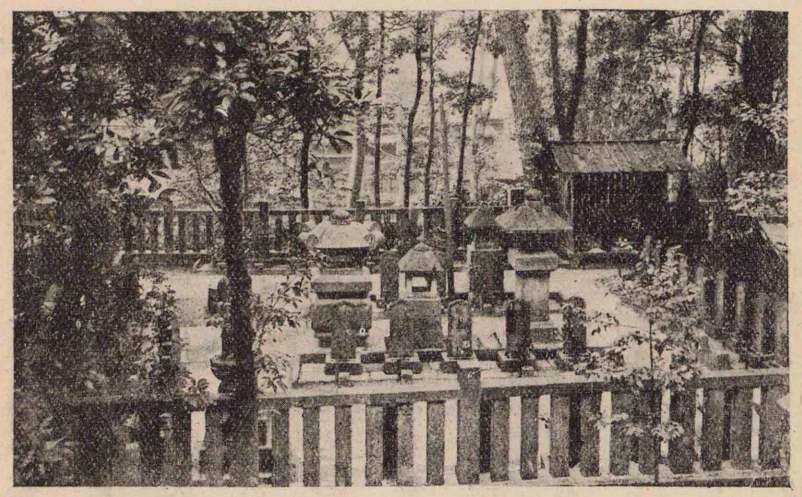
紛粉

富森正因（通稱助右衛門。時に年三十三。）

仙石伯耆守（但馬國出石城主仙石久尚。）

ぬ、赤穗の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。風説は區々たり、飛語は紛々たり。曰く、吉良氏を襲ひしものは獨り四十七人に止らず、此の外猶黑裝束を爲せる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。曰く、上杉氏の兵は四十七人を追擊せり。曰く、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。

良雄は吉田兼亮、富森正因を、大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みて其の志を告げ、靜に官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人あり曰ふ、「上杉氏の衆至る。」と。良雄は同志を警めて防禦の備を爲



四十七義士の墓

せり。而して上杉氏の衆は終に來らざりき。

此の日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川（熊本）、久松（松山）、毛利（長府）、水野（岡崎）の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川

綱利（熊本藩主。忠興四代の孫。）

枉柱

ストア（古代ギリシヤの哲學の一派。意志の鍛錬を主眼とせり。）

綱利は良雄等に訣別の盃を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。

良雄は外温藉にして、内に枉くべからざる意志を有したりき。彼は何事も打靜めて、騷がしきことを嫌ひたりき。彼は如何なる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども、彼は徒に平和を愛するものに非ず。なすべき事は必ずなし遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職として此の品性ありしに由れり。（愛山文集）

武藏野に（武藏野と題する琵琶歌の起句。）

昔鹿兒島には夜咄といふものがあつた。今の修身ともいふべきもので、夜なゝ兵兒仲間が寄合つて談話するのである。此の話は、兵兒頭や、兵兒を了へた壯年の人がしたもので、おもに東西古今の英雄豪傑の言行や、藩公・藩臣の武勇談や、忠孝談などをして聽かせた。忠の模範には赤穗四十七士、孝の手本には曾我兄弟を推して、信仰の標章とした。

毎年十二月十四日、四十七士討入の夜には、兵兒仲間が集まつて、赤穗義臣傳といふものを讀んだ。一痕の寒月は皎々として半天に在り、吹き荒ぶ木枯樹梢に咽ぶ。眞に元祿の昔が偲ばれる。兵兒等は高下駄を踏鳴らして、思ひ〳〵にやつて來る。或は「武藏野に草は色々多かれど」など琵琶歌を高朗しつゝ來るものもあれば、沈痛な柴笛で「百戰無レ功半歲間」など詩

吟をやつて來るのもある。時刻が來れば、聲のよい者が上座に控へて讀み始める。他の仲間は胡坐を組んでずらりと前に居並ぶ。腕組をするもの、臂を張るもの、兩手を膝についてに反身になつて睥睨するものなどさまざまである。「大高、槌を揮つて扉を裂けば、武林唯七斧を以て樞（クワウル）を折く。時に衆皆一度にどつと入る。」などの處々で、チ・エスト〳〵の聲が四壁を動かす。吉良が突かれて首を取られるの一條に至ると、臂を揮ひ腕を鳴らして、チエスト〳〵ばかり總立となる。

中休には粟のゆばを啜る。夜のほの〴〵と明け初めるころ讀み畢る。畢れば一同打連れて山登をなし、或は遠足を試みるなど、意氣天を衝くの有樣である。鹿兒島城下の兵兒は、未明から出かけて三里もある島津義弘公を祭つた德重神社に參拜する。（薩南の美風——田中白茅）

百戰無功　西鄕隆盛が岩崎谷の洞中にて作れりと云ふ詩。「百戰無功半歲間、首幸得返家丘山、笑儂向死如仙客、盡日洞中棋響閑。」

大高　源吾忠雄。

吉良　義央。

島津義弘　島津家の祖、剃髮して維新と號す。元和五年（約三〇年前）歿、八十五歲。

一八　切腹の話

木宮泰彥

明治元年正月、土佐の藩士が和泉國堺浦で、フランスの船員に暴行を加へたため、その中の二十名は、同國公使オレンロッシユの要求によつて、同地の妙國寺で切腹せねばならないことになつた。切腹は同公使立會の下に行はれ、二十名の侍は一列に並んで、第一のものから順次に割腹し、十一番目のものにまで及んだ。戰慄膚に粟が生じながらも、悚へに悚へてこの光景を監視してゐた公使も、到頭悚へきれなくなつて、爾餘九人の處刑に對しては、中止を申し出るに至つたといふことである。

木宮泰彥　靜岡縣の人、山形高等學校教授。

妙國寺　日蓮宗、大阪府堺市。

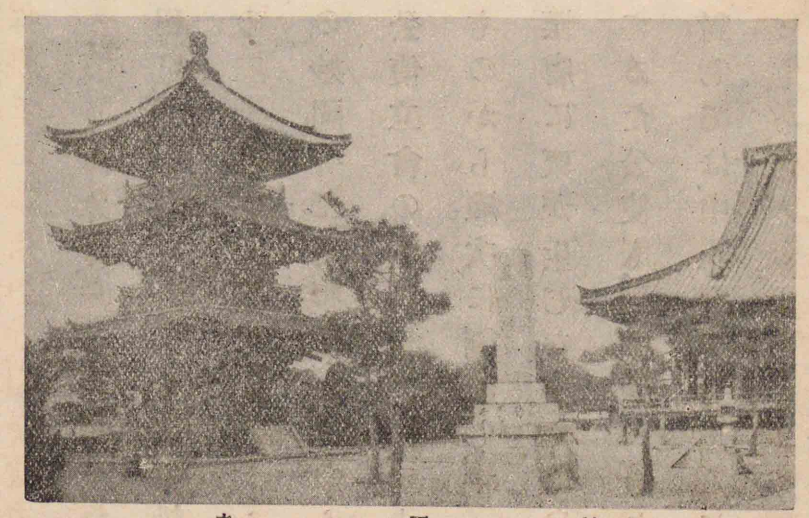
粟

外國では、自ら屠腹して死ぬやうなことは全くその例がないから、公使の驚いたのも無理はない。我が國でも、上古に於ては殆どその例がない。六國史などを繙いて見ても、縊死とか燒死とか毒死とかいふやうなことはよくあるが、自ら割腹して死んだやうなことは見當らない。

六國史　日本古代六種の歷史書、即ち日本書紀・日本續日本紀・日本後紀・文德日本後紀・三代實錄・三代實錄の總稱。

繙　藩

續古事談　著者未詳、鎌倉時代の作、古事傳說を集む、三卷。



妙國寺

續古事談といふ書物には、藤原保輔といふものが、刀を拔き、腹を切り、腸を抽出して死んだことある。これが我が國の歷史に見えた切腹の始だといふことである。切腹が最も廣く武士の間に行はれるやうになつたのは、源平時代以後のことで、保元物語に、源爲朝が家の柱を背にあてて切腹したことが見えてゐる。この時代の切腹は主として、敵の捕虜となつて繩

藤原保輔　大盜袴垂。一說に保昌の弟なりと。

保元物語　著者不詳、保元の亂及びその前後の見聞を記せる書。

日本軍記物の始め

切腹の光景

曝瀑

伐代

目の恥を曝したり、もしくは敵の手にかゝつて嬲り殺しの辱を受けるのは、名譽ある武士の體面を汚すことの最も甚だしいものとして之を行つたので、決して敵に對する恐怖の心から行つたのではない。隨つてその方法も、なるべく剛勇を示すために、故らに腹十字に切り、次いで心臓に突立てたのである。別に咽喉を突くには及ばないけれども、人によつては、時にさうしたものもあつて、誠に悲壯を極めた。

戰國時代は戰亂が打續き、武士の氣風も極めて殺伐に傾いた時であつたから、武士の切腹する場合が甚だ多かつた。敵軍のために幾月か包圍され、城中弓矢盡き、糧食盡き、また力も盡きて、遂に敵軍に降伏するやうな場合には、城將は使者を以て敵將に交渉し、その檢使を迎へて自ら切腹し、部下の衆命に代ることもあつた。そして、その方法も多くは慘酷を極めたものであつた。例の十字形に屠腹して、腸を抽出すものも少くなかつた。世人はこれを「潔い最後」「雄々しい自害」と褒めたゝへたのであつた。

裏(褒)

この頃から、切腹は刑の執行方法として用ひられるやうになつた。しかも切腹は身分ある武士に對する處刑としてだけ用ひられ、身分の低い雜兵はこれに與ることを得なかつた。

徳川時代に於て、かの赤穗四十七士に對して切腹を命じたのは、幕府の最も苦心したところであつて、義士もこれを

以て無上の光榮としたのであつた。なぜかといふに、義士の面々は、町人・人足に身を窶し、深更人家に忍び入つて亂暴・狼藉を働いたのは、幕府の法令を無視し、上を畏れない大膽不敵な不敬行爲であるから、當時の法令により、當然夜盜と同一視されて、討首にされることゝ思つてゐたからである。

しかし彼等の精神とするところは、主君の仇を討つにあつたので、その忠烈な志は實に千古の龜鑑とするに足りる。故に幕府がもし彼等を討首の刑に處すると、「文武忠孝を勵まし、禮儀を正しくすべきこと。」とある武家法度の一箇條と正しく矛盾することになる。そこで幕府の當局者は度々評議を重ねた上、遂に切腹を仰せつけることになつたので

窶・窶
龜（亀）
矛盾

ある。彼等義士は、もとより死を覺悟してゐたのだから、切腹に處すると、幕府の法令も立ち、武士の忠義も沒せられないことになる。彼等の死は痛ましいことではあるが、彼等の死によつて一層世間の同情を惹き、千載の後までも、忠義の鑑となるだらうとの趣旨に出たのであつた。

（面白い日本歴史の話）

既令　冷鈴　零領　嶺
成今　吟衾　琴含　貪
文字分　紛粉　忿頒　貧

一九　兎狩

徳富蘆花

収穫が濟む。霜が降る。裏山の楓が染まる。すると兎

徳富蘆花　名は健次郎、熊本の人、文章家。

網綱

関(関)

狩がそろ〳〵始まる。修繕に遣つてあつた網も出來て來る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆・草鞋の用意に忙しくて、僕等は何も手に着かぬ。

徳富蘆花

愈、その日になつた。炊事番は夜半に起きて握飯を拵へる。皆支度して、塾の庭に勢揃する頃は、午前三時過でもあらう。月が白く冴えて居る。三たび関の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は網をかついで、高らかに詩などを吟じて行く。僕等は默つて、併し心は得々として尾いて行く。

焚楚

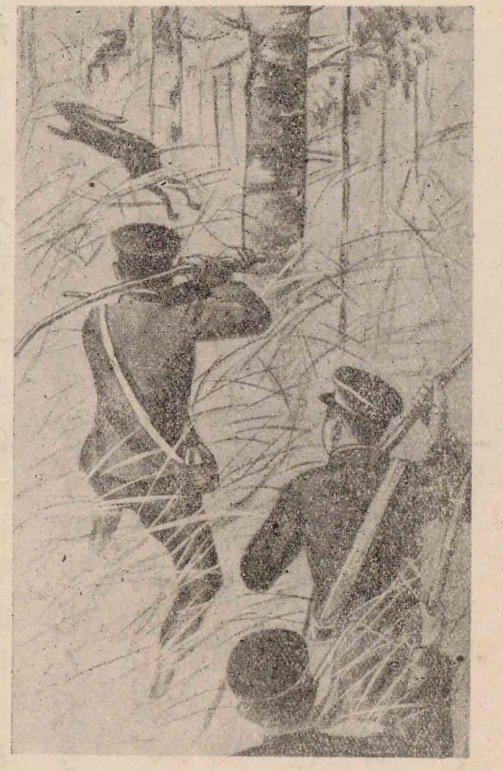
ねむさうな雞の聲のする村も過ぎ、けたゝましく犬の吠えかゝる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も來たらう。月落ちて、野は一面の曉闇、前に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふと、すばらしく大きな、眞黑なものが鼻の先にあらはれる。山だ、目的の山だ。まだ早い。皆、焚火をしながら、天明を待つて居る。

僕は藁の上に寢ころんで居ると、背は寒いが、顔や腹は焚火に暖まる。炎々と立昇る焔の間に、ちら〳〵見えて居た一同の赤い顔が次第に遠くなつて、ついうつとりと一寢入したと思へば、忽ち起されて。眼をこすつて起上ると、なる程、天明だ。東が白んで、曉の風が切る樣に面を吹く。焚火

紫柴

の跡だけ黑い圓を描いて、四邊は一面の霜だ。やがて勢揃して山にかゝる。進軍の號令がかゝる。鬨の聲が一時に揚がる。二山も追ふ頃はもう朝日が晃々と秋の空に昇つて居る。

今思うても愉快だ。秋が黃に、紅に、紫に、鳶に、あらゆる色彩のかぎりを盡した木を押分け、葉を打ちはらひ、聲をあげて登る心地。網近くまで追ひつめて、どうかと思つて居る時、どこからか



兎狩

握幄渥

「これた。」といふ聲がして、われ知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地。網番をして、攻寄せる勢子の叫の間近になるのに、兎のうの字も駈けて來ず、「あゝだめ。」と落膽する時、突然がさがさと音をさせて、覗く鼻先へ飛込んで、二つ三つ網ながらにとんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかかつて押へる心地。落葉かき分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根、草の上に脚投出して、握飯にかぶりつく心地。食つてしまつて、落葉の床に仰向けに寢て、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顏を冷々した風に吹かせる心地。數へ立てると際限がない。

秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬに、もう鴉が啼出した。

遙に見える湖や川は、金の如く夕日に閃いて居る。獲物は蔦葛で四脚を縛つて、大人組が昇いで、どくに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら〳〵後から還つて行く。山を降りて野に出ると、日は彼方の森に沈んで、夕煙が村々から立昇る。と思ふと、薄紫に煙る野末に、大きな月が顔を出す。その月がやゝ高く、やゝ小さくなつて、うちつれて歩み行く影の大分短くなる頃には、僕等はもう塾に歸り着いた。草鞋をぬいて、顔を洗つて、先生はじめ一同大胡坐で、てんでに兎汁を盛つて飯を食ふ。この兎汁は別名を大根・胡蘿蔔・牛蒡・豆腐・蒟蒻といふのではあるまいかと思ふ程、正味は少い。併しその味、否、それよりも食つてしまつて、着物も更へず、ぐつすり寢る時の心地は何ともいへない。夢も見ない。身動きもしない。翌朝の九時頃までは死骸も同然だ。

（思出の記）

兎（兎）の字は、うさぎの蹞（かた）んでゐるところを象（かたど）つたもので、右方の點は尾の形である。兎が逃げて、その尾が見えなくなつたのが免の字で、「まぬかる」と訓む。兎は隨分足の疾いもので、容易に罠（わな）にかゝらないが、それがたま〳〵罠にかゝつた、如何にも仕合せの悪い兎である、といふ意味を表はしたのが、無實の罪の冤の字。冖冠は上から物がひきかぶさつた形だ。既にこの兎の字があれば、逸の字は無くてもよささうなものだが、兎がとゝつとゝと逃げてしまつたといふ意味で、兎に辶（しんにう）をかけた逸の字が出來た。辶は進み行く義である。（漢字雜話）

忌忘

二〇　休暇日記

十二月二十五日。晴。今日より休暇となりて、身體伸びす。冬の日影ほか〳〵と暖かに、山茶花の花二三輪障子に映れり。昨日までの學校の忙しさを想へば、夢の如し。

仕事師門松を立てに來る。門に出でて見る。例年よりも大きなるを立てたり。隣家山田君の宅は忌中にて立てず。

家に入らんとする時、郵便脚夫、クリスマスの美しきカードをもたらす。永井君のなり。直ちに豫て求め置きしカードを贈りて答禮す。

肩盲

夕、同君を訪ひて、クリスマスの式に列なる。飾られたる常磐樹に映る燈影、あかく神々し。樂の音、讃美歌の聲、莊嚴の氣、和樂の象、交、君が家に滿つ。更けて出づ。星多き夜なり。

二十六日。曇。終日、父上の年賀狀の表書す。五百枚書きあげしは、夜の九時頃なり。鉛筆やペンのみ持ちし手の、久々にて筆を執りし故にや、肩張りて堪へ難し。入浴して臥床。

二十七日。晴。午前、父上小遣を餘分にたまひたれば、中西屋に駈けつけて、新刊のスタヂオを求む。歳暮の街の賑しき中を、此の書かゝへて欣々として歸る。早速披き見て、

飯飲

外國の進歩せる藝術に驚く。折柄、田中君來る。共に展觀して、鑑賞夕に至る。歸らんといふ同君を强ひて、夕飯を共にす。夜、同君と共に出でて、雜誌屋の店頭に立つ。新年號の各種累々として、こりぐ〳〵の新粧、目まぐるしきばかりなり。妹の爲に少女世界を求む。

二十八日。晴。事なし。

二十九日。同前。

三十日。晴。午前、永井君よりカルタの練習に招かれたれど、行かず。午後、妹の友垣五六人打連れ來り、庭上にて羽子つき交はす。

三十一日。曇。友人への賀狀に、十枚ばかり犬を畫く。

去年とやいはん　上句「年のうちに春は來にけり一年を」（古今集）

推堆

妹傍より見て「猫の樣ですね。」と云ふ。「お前にも何か畫いて上げやうか。」といへば、笑つて頭をふる。

一月一日。雨。後、晴。朝、起きしばかりの處へ、田中君盛裝して來る。予が寢ぼけ顏を見て「去年とやいはん今年とやいはん。」といふ。此の君は、級中第一の歌人として推稱せらるゝ人。上らずして去る。

午後、新聞の初刷來る。犬の繪に、これはといふものなし。予の例の猫犬も、全然棄つべきにあらずと思ふ。父上へは年賀狀百通ばかり來りたれど、予へは一枚も來らず。夜、寶船「寶船」と賣りあるく聲す。

二日。晴。後、曇。來れり來れり、一時に五六枚。然も繪

寫（寫・写）

葉書ばかりなり。藤堂君の愛犬を寫生せしもの、最も見るに足る。尋いで英文の賀狀來る。差出人の名を逸せり。新年早々、そゝつかしき事かな。父上の追加の賀狀、百枚ばかり表書す。

夜、左隣の家よりカルタ會に招かる。母上、妹と行かる。夜更くるまで賑かなる聲止まず。

三日。四日。五日。風邪の氣味なれば、引籠りて新年の雜誌を讀む。

六日。晴。朝、近藤君・中村君來る。連立ちて今井先生を訪ふ。先生歡んで迎へられ、「休暇中、何か面白い事があつたかね。」と問はる。予、先づ「何もありませんでした。」と答へけるに、「君等の年配の時分は、正月が面白いものだが。」といはる。それより、「こんな歌を詠んだ。」と示さるゝを見れば、勅題「新年雪」を詠ぜられたるなり。夫人の御手料理を戴き、夕刻辭して歸る。

七日。晴。休暇も今日限りなり。何となく心の淋しさを感ず。夕、門毎の松取除かる。風寒し。（日記文範に據る）

二一　日記の七德

三上參次

我が邦には、上は王公・大人より下は匹夫・庶人に至るまで、日記をしるすならはし古より行はれて、その盛なること、支那にも西洋にもまた其の比を見ず。早くより傳寫せられ

三上參次
兵庫縣の人、國史家。文學博士、東京帝國大學教授。

申牛
甲午
サル・ウシは
いづるに出で
ぬキノエ・ウ
マ。

懶嬾

又印行せられて、世に著れたるものは汗牛充棟ともいふべく、近年に至り、はじめて出でたるものも亦少しとせず。是等古人の日記を見て、予は、夙に思へらく、日記をしるすには七つの德ありと。蓋し一身一家の事、世上の事、日常思ひもし感じもし、また、見聞し經歷せる所をしるすが故に、知らず識らず、日記をつくる人をして、觀察力を鋭敏ならしめ、周密ならしむること、其の一なり。初のほどは日記をつくるに懶く、或は日を記し陰晴を注して、其の下を空白にすること など多けれど、次第に慣るゝに隨ひては、また煩しきを覺えず、その間に、自ら忍耐力の養はれたるを感ぜしむること、其の二なり。日々の記事を了へたる後これに向へば、或は怠

怠たらしめ、或は慊焉たるに堪へざらしめて、恰も明鏡に向ひたらんが如く、吾が身を省みるのたよりとなること多し、これ其の三なり。思ふことをいはざれば腹ふくるゝは人の常なり。さりとて、喜怒哀樂をうちつけに他人に分つべきにもあらず。かゝる場合に日記をしるすときは、日記こそ心のおかれぬ無二の友なれと喜ばるゝこと多し、これ其の四なり。老いたる後の回顧の料となること、其の五なり。筆まめとなること、其の六なり。而して、王公・大人の記錄はさらにもいはず、匹夫の日記なりとも、孰れか後の世の歷史家の好材料たらざるべき。これ其の七なりとす。予は常に此の七德を擧げて子弟を敎へ、日記をしるす習慣を養は

しむるなり。

二二　句讀點

薄田泣菫

薄田泣菫　名は淳介、岡山縣の人、詩文に名あり、大阪毎日新聞社員。

文章を書くものにとつて、句讀點ほど疎かに出來ないものはない。合衆國政府は、この句讀點一つで二百萬弗損をした事がある。

何時だつたか、同國の政府が、外國産の果樹を成るべくどつさり移植して、かうした果物の供給で餘り外國に金を拂ひたくないといふので、外國産の果樹輸入は無税にするといふ海關税法を拵へた事があつた。バナヽや蜜柑を廉く食はうといふには、こんな結構な規則は滅多に無かつたが、肝腎の法文を印刷する場合に、どう間違つたものか、外國産の果樹「フオリンフルートプラント」といふ言葉の中に、句讀點が一つ挿まつて、「フオリンフルート、プラント」となつて、そのまゝ世間に公布せられてしまつた。さあ、外國産の果物が無税になつたといふので、蜜柑や葡萄やレモンやバナヽ、といふやうな果物が、大手を振つてどん〳〵入つて來た。それと氣づいた政府が法文を訂正するまでに、關税の收入がいつもよりざつと二百萬弗少くなつてゐたさうだ。

Foreign fruit plant.

Foreign fruit, plant.

句讀點といへば、ある時、近松門左衛門の許に、かねて昵懇の珠數屋が訪ねて來た。その折、門左は鼻先に眼鏡をかけて、自作の淨瑠璃にせつせと句讀點を打つてゐた。珠數屋

來(未)

近松門左衛門　本名を杉森信盛といふ、淨瑠璃作者、享保九年(約二百年前)歿、年七十二。

はそれを見ると、急に利いた風な事が言つてみたくなつた。

「何やと思うたら句讀點かいな。そないなもの、漢文には要るかも知れへんが、淨瑠璃には要らんこつちや。つまり隙潰しやな。」

門左はひどく癪にさはつたらしかつたが、その折はたゞ笑つて濟ました。

それから二三日過ぎると、珠數屋あてに手紙を一本持たせてやつた。手紙は珠數の注文で、なかに「ふたへにまげてくびにかけるやうなじゆず」といふ文句があ

上方言葉

濟（済）

近松門左衛門

珠數屋は封を切つてみた。

蟹（蟹）

つた。珠數屋は、「二重に曲げて、首に懸けるやうな」とは、隨分長い珠數を欲しがるものだと思つたが、早速そんなのを一つ拵へて持たせてやつた。すると門左は、注文書に違ふと言つて押返して來た。珠數屋は蟹のやうに眞赤になつて、皺くちやな注文書を掴んで門左の許に出掛けた。門左はじろりとそれを見て、「どこにそんな事が書いてあるな。『二重に曲げ、手首に懸けるやうな』とあるぢやないか。だからさ、淨瑠璃にも句讀點が要るといふんだよ。」（後之茶話）

新井白石
名は君美、德川時代の大儒、享保十年（約二百年前）歿、年六十九。

二三　わが幼き頃

新井白石

我が幼き頃、上野物語といふ草紙ありき。これは寛永寺

寛永寺　天台宗、東叡山と號す。元和元年僧天海の草創、徳川家の菩提所、上野公園は其舊境内なり。

羣・群

我が父　名を正濟といふ。

屏（屛）

新井白石

の花見に、人の羣れ來る事どもを記ししものなり。我が三歳なりし春の頃にや、火燵に足をさしてはらばひ居て、その草紙を見ながら、筆紙をもとめてすきうつしけるを、母にておはせし人の見給ひ、十が中一二はまことの文字もあるを、我が父に見せまゐらせしを、父の友なる人の來り見しより、人々も聞き傳へて、そのうつししものどもをとり傳ふることになりたり。我十六七歳の時、上總國にゆきしに、彼處にてその寫ししものを見る事を得たりき。又、その頃、屏風に我が名を題せしに、二字はその體をなしたるものの後までありしが、火に燒け失せたりければ、今は、その頃のものは我が許には遺らず。

この後は、常の戲に、筆とりて物書くことのみ習ひければ、おのづから日々に文字を見識りたれど、物讀む師友とすべき人なかりしかば、たゞ往來物の類などを讀み習ふのみなりき。

戲（戯）

往來物　日用文を集めたる書の稱。

戸部　戸部は民部省の唐名。上總久留里侯土屋民部少輔利直。

富田　はじめは小右衛門某といふ、後には覺信といひし人なり。（原註）

太平記評判　太平記中の兵事を評判したる書五十卷、和田榮閣著。

戸部の家人に富田とて、生國は加賀國の人と聞えしが、太平記評判といふ書を傳へて、その事を講ずるあり。夜々に我が父など寄りあひつゝ、その事を講ぜしめらる。われ四五歳の時に、毎にその座に侍りて之を聽くに、夜いたく更けぬれど、遂に座を去りし事もなく、講畢りぬれば、その義を請

ひ問ふ事などありしを、人々奇特の事なりといひき。

六歳の夏の頃、上松といひし人の、少しく文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、その意を解ききかせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしをば、人にも講じきかせたりき。「この兒文才あり、いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など、彼の人もいひしかど、頑なる昔人達のいひしは、「昔より言ひ傳へし事あり。利根・氣根・黄金の三こんなくしては學匠になり難しといふなり。この兒、利根こそ生れつきたらめ。なほ幼くしてその氣根の事も料り難く、家富めりとも見えねば、黄金の事心得られず。」などいひあへりしに、我が父も、「戸部の御いつくしみによりて、常に側を離れ

上松　忠兵衛某といふ、駿河今川の家人上松が後にて、連歌などをもこのみて物よく書きし人なりき。（原註）

絶句　漢詩の一體起承轉結の四句より成り五言七言等あり。

擇（択）

此の時白石は土屋侯の小姓であつた

まゐらせず。學に入れ師に從はしめん事もかなふべからず。されど、をさなきより、物書く事をば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて、物をば書き習はしめたくこそ侍れ。」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國にゆき給ひしあとにて、手習ふ事ををしへしめらる。

その冬の十二月半、戸部歸り參り給ひしかば、常に側に侍ふ事、故の如く、明の年の秋、また國にゆき給ひしあとにて、課を立てられて、日の中には行・草の字三千、夜に入りて一千字を限りて書き出すべしと命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課業は未だ滿たざるに、日暮れんとすること

上總國　千葉縣君津郡久留里町を指す。土屋侯の領土。

度々にて、西向なる竹縁のある上に、机を持ち出でて、業ををへぬることもありき。又夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられし者と竊かに謀りて、水二桶づつかの竹縁に汲みおかせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ棄てて、先づ一桶の水をかぶりて、衣うち著て習ふに、はじめ冷かなるに目さむる心地すれど、暫し程經ぬれば、身暖かになりて、またねむくなりぬれば、水をかぶること前の如くす。二たび水をかぶりぬる程には、大やうに課をも滿てたりき。これ我が九歳の秋冬の間の事なり。

かゝりし程に、この頃よりは、我が父の人に贈り給ふ文をば、かたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てら

竊（窃）

庭訓往來　玄慧法印作、漢文めきたる十二ケ月の往復の書簡文。

冊（冊・冊）

遲（遲）

れて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日の中に淨寫してまゐらすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せまゐらす、ほめ給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の人と贈答し給ふ程の文ども、大方は我に命ぜられき。

また、十一歳の時に、我が父の友に關といひし人の子どもは、太刀打の業にすぐれて人に敎ふることありしを、我にもこの業敎へられん事を望みしに、「わぬしいまだ幼し、此等の業學ばんこと遲からず。」といふ。さこそ侍るべけれど、太刀使ふこと少しも心得ざらんには、刀・脇差、腰にせんも誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所誠にしかなり。」とて、一

つの業を傳へて習はしめたり。かゝりし程に、その歳十六になりし者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀をとりて、三度あひて、三度まで勝つ事を得たりしにぞ、人々も亦興に入りて笑ひたりける。その後は、常にかゝる武藝の事ども を好みしかど、物讀む事をも好みければ、常に我が國の物語・草紙等の類をば、見ずといふものもなかりき。

十六になりし者　神戸といひしものの二男なり。（原註）

興　連体形

興　已然形

若侍　長谷川といふものなり。（原註）

翁問答　中江藤樹著、歴史、文學等の雜事を記す。全二卷。

十七歳の時に至りて、同じやうに召し使はれし若侍の許に行きしに、案の上に書あるを見れば、翁問答と題せしものなり。如何なる事をか記しぬらんと思ひて、借る事を得て、家に携へ歸りて見けるにこそ、始めて、聖人の道といふものある事をば知りけれ。これより道に志切なりけれど、師と

京の人　江馬益庵をいふ、名は玄牧。（原註）

小學　六卷あり、支那古來の嘉言善行を輯む。

程子の四箴　宋の程頤の視聽言動の四箴

四書　大學、中庸、論語、孟子。

五經　易經、書經、詩經、春秋、禮記

韻會　韻に關する字書、元の熊忠撰。

字彙　畫引字書の始。明の梅膺祚撰。

折焚柴の記　白石の自叙傳、三卷あり。

すべき人もあらず。京の人にて醫を業とし少し學問あるが、戸部の許に日々來れるあり。この人に向ひて志の程を語りしに、小學の題辭を講じきかせられたり。その後、又、程子の四箴をも講じきかせられしより、やがて、小學の書を日夜に誦し習ひて、業既に畢りぬれば、四書を誦し習ひ、その後また、五經をも誦し習ひたれど、此等皆々句讀を授けし師あるにもあらず、自ら韻會・字彙等の書によりて誦し習ひければ、後に思ふに僻事のみぞ多かりける。（折焚柴の記）

畢　已然形

新井白石の熱烈剛直な人格は、その由つて來るところがある。白石の父はまことに古武士の風格を備へた人であつた。

母もまた賢婦人であつた。庭訓の嚴重であつたことは、白石みづから「折たく柴の記」に父の教を記して「教へ給ひし事ども多かりしうちに毎に思ひ出でらるゝことは、男兒は、たゞ事に堪ふることを習ふべきなり。これを習ふべきことは、何事にもあれ、わが極めて堪へがたく思ふ事より堪へはじめぬれば、久しくしては、さのみ難事と思ふ事はあるべからざるなりと仰せられき。」といつてゐること、其の九歳の時、すでに一日に行草三千字、一夜に一千字の習字を課せられたといふ事などによつても、其の一般を窺ふことが出來る。「學問の事、某儀、古人に於いて萬分の一を望み申すべきにはこれなく候へども、貧學苦學の事に於いては、又古の貧書生に多く讓り申すまじく候」と告白してゐるやうに、赤貧洗ふが如き中に不退轉の志をいだいて、一意研學に猛進することの出來たのも、その素質の

幸田露伴　名は成行、東京の人、文學博士。

忠敬　千葉縣山武郡小堤村の人、神保氏。香取郡佐原町伊能氏の養嗣子となる。文化四年（約一二〇年前）歿、年七十七。

然らしめたところとはいへ、また父母の教訓によることが多かつたのである。

二四　伊能忠敬の晩學

幸田露伴

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に讓るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意專心、たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美しく果さんことを期し居たりき。

凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざることには一擧手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは免れがたき習なり。たゞひ己が欲せざるこ

抑柳

こなりとも、その爲さざるべからざることなる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事をなすは、その人、啻に才氣あるのみならず、また實に德量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて德量ある人は少し。年少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刀の肉薄きが如し、物を截ることはよくすべし、折るゝ恐は免るべからず。されば世の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡しがたし。

伊能忠敬

忠敬が算數・曆術の學を嗜み、且これをよくすべき資を抱き

壯(壯)

ながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、「伊能氏を嗣ぎたる上は伊能氏を榮えしむべし。」といふを唯一の希望として、三十餘年一日の如く、只管その家業に丹誠したるは、實にその德量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ。景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、是に於て圓滿に果されたりといふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は忠敬年既に五十歳、常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途多望なる青年の春

なり。爲すある人には、如何なる場合もわが力を試みるべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずることなかれ。

歎（嘆）

佐原　千葉縣香取郡。成田鐵道の終驛。

深川　今の東京市深川區。

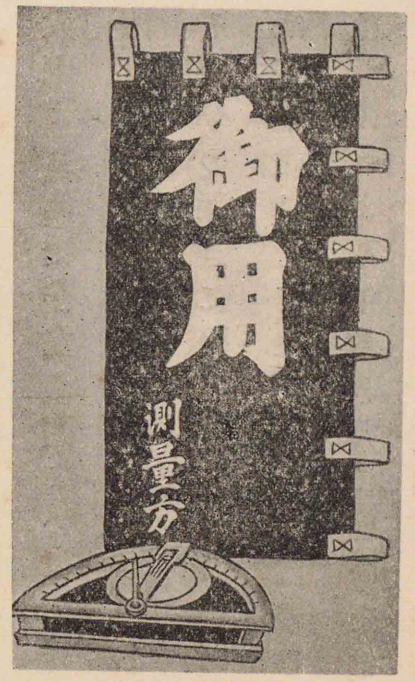
さるほどに、忠敬はその鄕里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生となれるなり。尋常一樣に、笈を負ひて鄕關を出で、都門に遊びて師を尋ね、學に就くところの書生と異なるところは、たゞその若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委したるが、おのが滿足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。

容客

高橋作左衞門　大阪の人、名は至時。曆學者。文化元年（約一二〇年前）歿、年四十一。

をりから幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より、高橋作左衞門といふものを召されたり。作左衞門、東岡と號し、算數・曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服し、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歲にして、東岡は三十二歲なりき。普通の人情にては、おのれより年若き人に會ひては、たとひおのれが學業などその人に及ばずとも、なほ强ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、德量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふ

べき學識ある人に向ひて、拜伏するを厭ふべき、喜びてその門下生となれり。然れども、同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば屢、笑柄となしたりといふ。



伊能忠敬用具

晩學の難きは、實に何れの世にありても、かゝる事實の存するがためなり。是を以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。本來よりいへば、老いて學ぶは、たまたまその

恥（耻）

志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可かあらん。況やまた何の恥づべきところかあらん。思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於てはたゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明かなることなり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して、洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終にその學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべきものなきに至れり。

かくて忠敬が、始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を實地に運用する機に際したるは、實にその齡五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽齡用ふる

顯（顕）

隄・堤

に堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が、事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの、元氣勃々として燃ゆるが如き熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ。これ豈我に伊能忠敬あるを知らざるものにあらずや。（露伴叢書）

險阻（嶮岨）

師說（一部分）

わが前に生れて、その道を聞くこと、固よりわれより先ならば、われ從つてこれを師とせん。わが後に生れてもその道を聞くこと、亦われより先ならば、われ從つてこれを師とせん。いづくんぞ其の年のわれより前生たり後生たるを問はんや。この故に貴となく、賤となく、長となく、少となく、道の存するところは師の存する所なり。（韓退之）

韓退之　名は愈、字は退之、支那唐代の文豪。文章家唐宋八家文

二五　雪國の友へ

東京は近頃毎日の天氣つづきです。中野では毎朝手水鉢に厚氷が張ります。すゝ朝起きて見ると未枯れた菊の山茶花の葉などにまで一面の霜が置いてゐますが雪らしいものはまだ一向降りません。新聞で見ると東北の

方には大分雪が降つた様ですから越後の方でももう積つてゐるでせうね　僕は君と同じやうに北國に育つたものですから雪と聞くと胸が躍るやうな氣がします　北國にある時分には冬は僕の好きな季節の一つでした

「籠る」といふ心持がしみじみとはれるのは雪の中に限るやうな氣がします

越後ではどうかゐません　僕の國では盆が来る前には窓に雪囲いふものをはめ始めや入口などにも

腰高障子をはめ換へてその上に家のぐるりに雪囲といふものをします　それで家の中は一體に暗くなるのですが僕は又その暗さが好きなのでした　一體の暗さの上に外の雪明りが交つて入つて来るのでたゞ暗いといふのとは一種違つたしつとりしたなつかしみが感ぜられます　特に嬉しいのは雪の降る夜であの物の音もない静けさあの精緻な静けさは今思ひかへしてもいへません

さうして朝起きて見ると例の大雪なのです。大雪が降つて晴れた朝の爽かな心持あの一種比類のない爽かさを雪の中で育つた者でなくて誰が知りませう。貴君は今お國にゐてその雪の中に籠つてゐるのだと思ふと羨しくなります。僕は東京に来て隨分久しい間雪が降らないなどといふものが矛盾のやうに感ぜられて居らしい事がしなりで困りました。さうして東京に来てから冬は一年中の嬉

いな季節になつてしまひました。假令年に四五度雪が降つたところで東京の雪は解けて道を悪くするのを厭がつてゐる雪ですからつまりませんね。降つてゐる雪のうちから春が萌え出す時分の新しい心持雪解の河水の響き道が乾いて塵と雪解で出来た街道の小流をまたぎながらも草履をはいて外に出られるやうになつた時の子供心のうれしさそんなものはすべて東京では味はれないのですね。

寒冷に天氣のいゝのが恨みですが
れで毎日雪もふらぬ曇つた空が續い
たらそれとそやりきれないと思ひま
す　あまり取りとめのないことばか
りで申譯ありません かりそれでき
りあげます　い、年をお迎へなさい

僕の愛する雪の中で　師走サの夜

北原白秋

二六　雀

曾て葛飾にゐた時、雀のお宿の私の草舍に、恐ろしい闖入者が來た事があります。冬の事でした。庭の枯木の百日

葛飾　東京府南葛飾郡小岩村。

紅に、その日も雀が鈴なりになつてゐました。その雀を何心なく眺めてゐると、私ははつと吐息をつきました。向うの破れ垣の間から、圓い小さな筒口のやうなものが、そろりそろりと出て來るのです。鐵砲でした。雀は何にも知らずに遊んでゐるのです。私は蒼くなつてたち上ると、

「いけない〳〵、雀を射つては。」

思はず聲をあげる、その拍子に、づどんと響くと、白い煙がばつとあがりました。それより迅く、一齊に雀は飛立つたが、その中の一羽が、ばた〳〵と落ちて來ました。私は跳足で飛下りると、もう激しい怒とあはれみとで胸がいつぱいになつたのです。何といふ無法な人間か、その男は。處も有

跣洗

らうに、他の庭木の雀に向つて發砲したのです。さうして而も巧に射落したのです。雀どころか、私は全く自分の心臓をも撃ち貫かれたやうに感じました。

私が飛んで行くと、垣根の向うでは、驚いて逃げて行く荒い足音がしました。が、もう濟んで了つてゐるのです。追つかけたつてどうなります。私は枯れた芝草の上に轉げ落ちてゐる雀を、思はず手に取上げると、可哀相なものです、白いホワイトシャツの雀は血まみれになつて、かはいゝ茶色の頭もがくりと俯向けてゐます。掌を開いて載せると、私の掌も血まみれになりました。私はその圓い温かな坊主頭を右の掌で撫でると、たまらなく寂しくなつて、暫時は

たゞぼんやりと突立つてゐました。と、枯木には次第に入日が傾いて、私の掌の上の雀も次第に金色になると、私の掌も細かに金色の光を放つて來ました、その靜な事は何とも云へません。私は、私の頭にも何かしら圓い輪のやうな光がかゝつて來るかのやうに感じました。

白秋筆蹟

「成佛してくれ。」私は頭を下げました。今度はいゝ世界に

戴冠

三崎（神奈川縣三浦郡にある町。）

生れて來る樣に、私は靜かに雀を戴きました。さうして何だか私の靈までが、はた〳〵と羽ばたいて、天へ歸つてゆくやうな氣がしました。「ちゆつちゆ」ふと氣がつくと、私は「ちゆつちゆ」と雀の聲をしながら、その雀の頭をまた輕く撫でてゐたのでした。

三崎の見桃寺にゐた時の事です。前の晩には雪がしんしんとふり積つてゐました。夜ふけになど、曹洞宗のその庵はいよ〳〵落ちついて、全く佛といふものの息づかひまでが聞えさうに思はれました。あり難さの限りでした。さら〳〵と庭の木の葉につもる雪の聲もしました。さぞあの木も寒いだらうと思ふと、掌を合せましたが、目が覺めて見ると、空は青く晴れて、冬青の木が一本、白い粉雪をゆすり落してゐました。そして枯木には、雀が小枝に一列に留つて、一つ〳〵かはいゝ聲をあげて、何だかかはいらしい話をしてゐました。かう〳〵しい、いゝ朝明けでした。雀達は何を話してゐたのか、今にもわかりません。が、あの位かはいゝ雀を見たのは初めてでした。思ひ出しても涙が流れさうです。私はその雀のお蔭で、初めて人間の世の安けさをも、美しさをも知る事ができました。本當の幸福といふものをも。（雀の生活）

明朋

杵さきやあたまあぶない雀の子　一　茶

雀の子そこのけ〳〵御馬が通る
赤馬の鼻で吹きけりすゞめの子
われと來てあそべや親のない雀
雀子のはや知りにけり隱れやう

二七　太陽と春

福田正夫

福田正夫
神奈川縣の人、詩人。

やはらかい風が、
輝いた海洋から地上にのぼる。
光つてゐる畑、
光つてゐる樹、
光つてゐる葉、

一つ一つがみんな春の呼吸。

綠の春は、
たのしげにゆらぎ、
よろこばしげにゆらぎ、
「生きてゐる、生きてゐる。」と光の中で囁く。
黑い土が其の下で燃えながら、
默つて光を吸ふ。

もえ立つ春の碧の空、
忍んだ冬の寒い憂鬱から、

南の國の春は解放される。
枯草の間の小さな草の葉、
菜の色、大根の色、
ふか〳〵とこめた太陽の愛。
とけるやうなやはらいだ空氣。

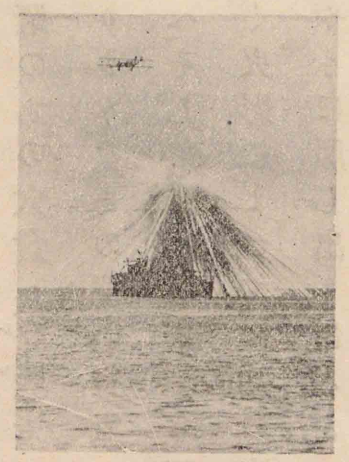
いま、
路をゆるやかに行く農夫。
其の手が光る。
其の鍬が光る。
輝いた地上の光に、
とけて行く愛の世界の春。（「農民の言葉」による）

吉江喬松
孤雁と號す。長野縣の人、早稲田大學教授。

二八　爆彈下のパリ

吉江喬松

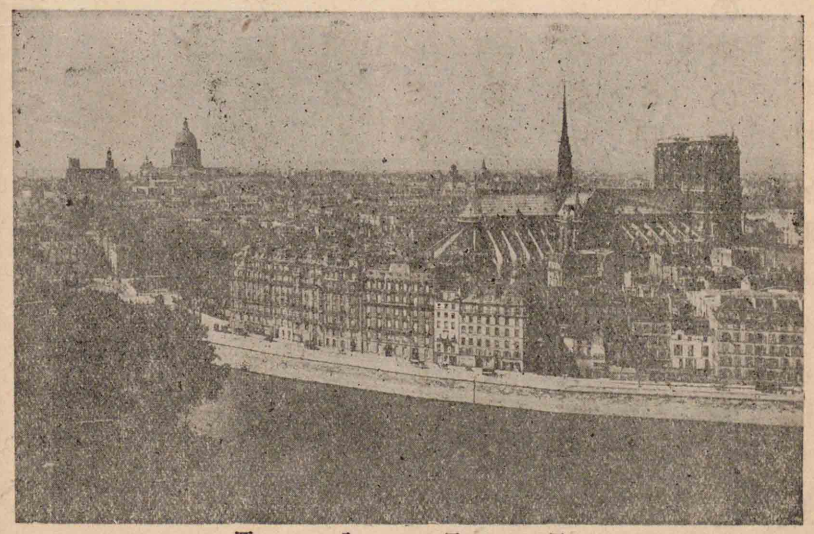
悲しげな、人を引込むやうな警笛の響は、今夜も亦聞えて來た。「警報がしましたよ。」といふ疳高い隣室の婦人の聲がしたかと思ふと、電燈が一時に消えて了つた。


爆彈投下

と同時に、階段を穴倉へ急いで降りる人々の足音が、私の室の上にも下にも騒がしくなつた。

蠟燭（蝋燭）
仄灰

私は今夜はもう穴倉へは降りまいと決心した。亂雜な騷のあの穴倉へ、呼吸もつまりさうなあの穢い空氣の中へ、そして、細い蠟燭から仄めく火影によつて、怪物の姿のやうに照し出される、あの避難者達の中へ逃込むことは、もう止めようと思ひ切つた。爆彈が落ちて來ても仕方がない。潰されるものな



巴里全圖

臆憶
留（笛）

ら何處にゐても同じことだらう、と云ふやうな一種の諦めが私を落着かせた。實際、最初は警笛の響く毎に、穴倉へ逃降りるのにも多少の好奇心があつた。次には煩はしくなりもし、疲れもした。終には、それに慣れもして、私は靜かに一人きり闇の中で部屋に留つてゐた。

最初は寢床に横になつてゐたが、流石に眠れもしなかつた。手探りで窓まで出て見たが、窓は夕方になると厚い窓掛を卸して、光の戸外に洩れるのを防ぐことになつて居るので、闇の中でも多少氣臆れがするやうな心持で、其の窓掛の端からそつと戸外を覗いて見た。

空全體が一つの響だつた。飛行機の唸りが眞黑な空に

漲つて、時々流星のやうな發火信號が其の響の間から流れてゐた。まだ夜の十一時頃だのに、街路には一人の歩行者もない。地上は全く鳴りを靜め呼吸を潛めてゐる。三百萬の住民は今盡く穴倉の中で首を縮めて居るだらう。

と、不意に、或響、大地を微かに震はせる響が、遠くに何物かの落下したことを告げた。これと同時に、空が一時に明るくなつて、ノートルダムの尖塔が、かつきりと其の明りの中に描き出された。爆彈の落下！　何處へ落されたのか分らない。多分ガールドユーノールか、其の附近かだらう。と思ふと、砲聲が四方から響き渡る。今爆彈を投じた敵機へ向つて砲擊を加へるのだらう。けれども、一時の明るさも

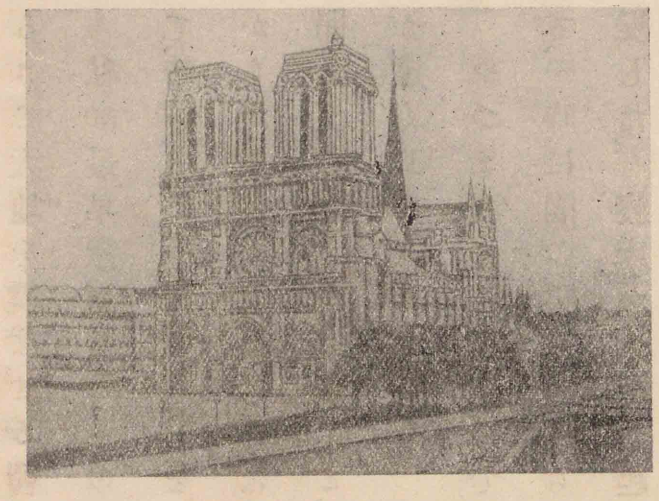
潛（潛）

ノートルダム　パリにある有名な寺院。

ガールドユーノール　北へ向ふ停車場。

又又　捨拾

すぐ消えて、又闇がパリ全市を包んで了つた。空は飛行機の唸りと發火信號の交叉とだけである。私は足音を忍ばせるやうにして寢床に歸つた。



ノートルダム

一時間も經過したらうか。身を投出したやうな一種の諦めと、微かな不安と、僅かな好奇心の雜つた心持、物を思ふでもなく思はないでもないいくらか投捨てたやうな心持、しんい心持、緊張したやうな、

苗笛

と靜まり返つた夜の中に、又時々窓を照らし出す不意の明るさと大地を震はせる響。これが戰爭だらうか。

私は最早窓まで行くのも煩はしいので、全く成行に任せて、暗い中に一種の壓迫を感じながら仰臥してゐた。何處からか人聲がし出した。街上に何かの氣配がして、足音が聞え出した。かと思ふと、又警笛が町々を呼んで過ぎるのが遠く耳に入つた。

やつと濟んだと思つて居ると、不意に電燈がぱつとついて、一時に闇の壓迫を散らしてしまつた。室内の光景が一變した。寢床から跳ね起きて、大聲で「やつと濟んだ。」と叫んでやりたくて耐らない樣な氣がして居ると、がた／＼と足音や人聲がして、下から階段を昇つて來る人々の騷が聞える。ほつとした氣持、脫れてまあよかつたこいふ氣持、太い呼吸をして見たいやうな氣持、そして、何人でも今までの押付けられてゐた氣持を語り合ひたいやうな氣持がしだした。私は急いで階段を降りて行つた。（佛蘭西印象記）

豬・猪

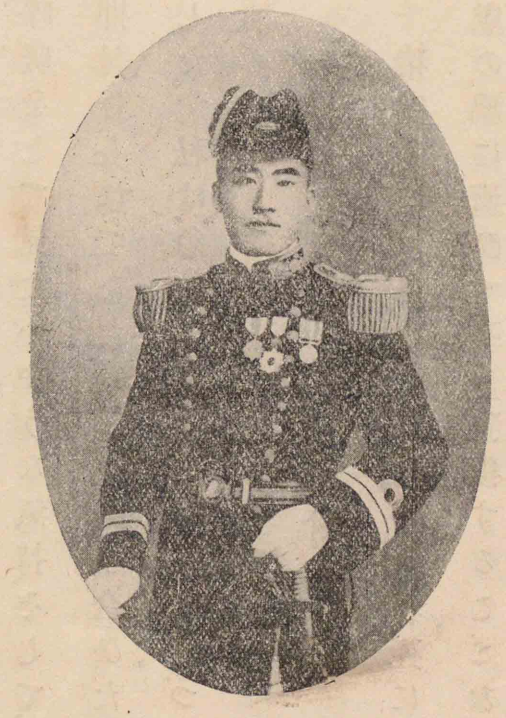
二九　佐久間大尉

猪突、敵におもむくは易く、從容、死に就くは難し。殊に不慮の禍に遭ひて、毫も狼狽することなく、應急の手段盡くるに至りて、自ら責任を重んじ、從容としてその職に殉せし佐久間大尉の最後のごときは、最も難しとする所なり。

岩國　山口縣玖珂郡。

沒歿

明治四十三年四月十五日、吳鎭守府所轄、第六號潛水艇は、周防の國岩國新港の沖合約一里の處にて、各種の演習に從事しけるが、機關に故障をや生じけん、俄然海底に沈沒して、その行方を失ひぬ。母艦・僚艦の乘組員は大いに驚き、直ちに百方捜索を始め、また無線電信にて、急を鎭守府に報告せり。されば府にては、卽刻軍艦豐橋に派出救助の命を發



佐久間大尉

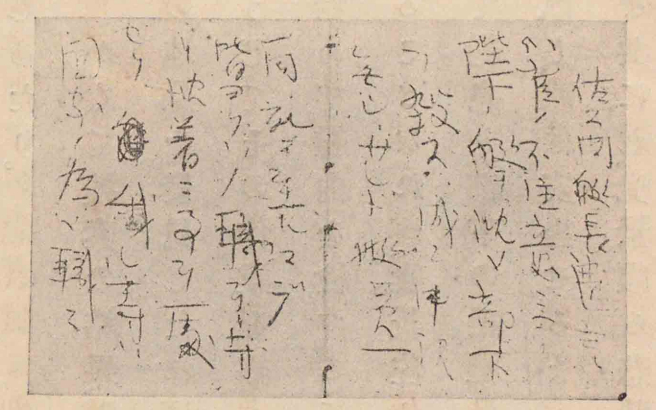
辛辛

臥(卧)

し、なほ驅逐艦及び水雷艇數隻をも加へて、遭難地に急行せしめたり。

かくて捜索の結果、翌十六日午後に至りて、漸くその沈沒の地點を發見したれば、直ちに引揚に著手し、十七日の朝辛うじてその作業を終へ、艇內の排水と換氣とを行ひ、こゝに始めて艦內を檢するに、潛水後すでに數十時間を經過したることなれば、艇長佐久間大尉は、腕を拱きたるまゝ端坐して絕息し、部下の乘組員、將卒十一名の勇士、いづれも或は仰臥し、或は安坐せるまゝ、勇敢なる死を遂げて、艇とその運命を共にし、光景頗る悲壯なり。その臨終の際、卽ち艇の沈沒後、午前十一時より午後零時四十分までの間に、大尉の書き

たる日記あり。その言々句々至誠より出でたるものにあらざるはなし。その一節に曰く、



佐久間大尉遺書

艇員一同死ニ至ルマデ皆ヨクソノ職ヲ守リ沈著ニ事ヲ處セリ我等ハ國家ノ爲メ職ニ斃ルト雖モタヾ遺憾トスル所ハ天下ノ士ノ事實ヲ誤解シテ爲メニ將來潛水艇ノ發展ニ打擊ヲ與フルニ至ラザルコトナキカニアリ希ハクハ諸君益〻勉勵シテ將來潛水艇ノ發展研究ニ全力ヲ盡サレンコトヲ

とて、部下の忠實職に殉ずる勇を賞し、一身の安危を忘れて、偏に國家のために潛水艇の將來を祈れり。さて又至尊に對し奉りては、

小官ノ不注意ニヨリ陛下ノ艇ヲ沈メ部下ヲ殺ス誠ニ申譯ナシ

と罪を謝し、部下の遺族の事を思ひては、憐を乞ひて曰く、

謹ンテ陛下ニ白ス我ガ部下ノ遺族ヲシテ窮スルモノ無カラシメ給ハンコトヲ我ガ念頭ニ懸ルモノ之アルノミ

終りに至り、海軍大臣以下、上長官に對して、最後の告別をな

し、更に其の末に、

呼吸非常ニ苦シ十二時四十分

と附記せり。

嗚呼これ大尉が、死の刻一刻に襲ひ來るに、從容自若として記したるものならずや。この遺文を讀むもの、誰かその沈著に驚き、その悲慘に涙を流さざるべき。何等の壯烈ぞ。

大尉名は勉、若狹の國三方郡の人なり。沈勇を以て知らる。その小學中學にある間は、修身・歷史に最も趣味を持ち、品行方正にして友情に厚く、常に讀書に耽りて、徒らに時を費さず。海軍兵學校にある間は、幸便ごとに海軍思想を鄕里の青年に普及せしめんことを圖り、遂に、その中學校に海

若狹　福井縣。

その中學校　福井縣小濱中學校。

軍用ボートを造らしむるに至れり。常に皇恩の忘るべからざるを唱へ、吉田松陰の士規七則を愛讀し、その句中の「斃而後已」の四字を宮城二重橋を寫せる繪端書に書して、士官室に掲げ居たりとぞ。

第六號潛水艇の沈沒したるは、もとより不測の變にして、必ずしも艇長の罪にあらず。されどその責を負ひて、職に殉ぜし大尉は、實にこれ義勇公に奉じたるものにして、艇長たる者の龜鑑なるのみならず、わが海軍の生命なり、日本武士の典型なり。豈偉ならずや。（中等國語讀本）

與謝野　寛

第六號潛航艇員の變死を悲しみて

鷗なすかづく御船は沈むとも造るすべありあたらますらを

士規七則　吉田松陰が士の規誡とすべきこと七個條を掲げ示したる文。

三〇　明治天皇の御遺物を拜す

笠井信一

笠井信一　靜岡縣の人、貴族院議員、

先月十七日、宮中より、地方長官一同に、午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、例刻に、參內致しましたところが、十一時すぎ、權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間、皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。卽ち私共は、この度、先帝の皇靈を拜する特別の御恩典に預つたのでございます。

そこで、私共は、光榮に感激しつゝ長く廣い御廊下に整列しまして、宮殿奧深く、權殿に詣つて、一人づつ、最敬禮を致し

先月　大正二年一月。

權（権）

廊

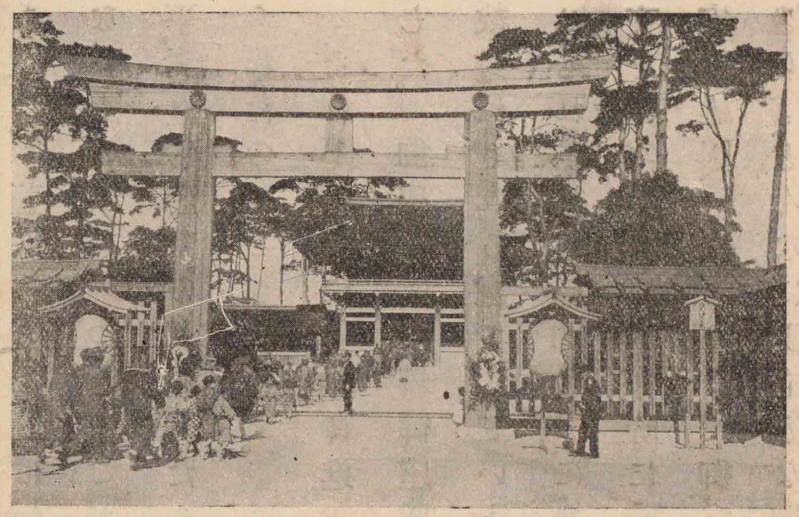
ました。蓋し、その瞬間は、何人と雖も、一種の靈感に打たれないものはなかつたでございませう。その權殿と申すは、平素、皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、これに充てさせられたのでございます。

それから、更に、奧殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は、表御座所とも申し上げ、萬機の政を、御親裁遊ばされる處でございます。先帝には、長くこゝに在らせられて、德教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖、一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。然らば、どんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なこ

裁

裁

瀟（瀟）　毯毯



明治神宮

こゝで、平常私共が參内の節、休息を許される御部屋の方が、却つて遙かに御立派である。しかも、餘り廣くない、二間續きの御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も、御椅子も、實に御質素なもので、絨毯の如きは、當初敷かれたまゝのもの故、後には色も大分褪

硝消

めて參りましたので、侍臣から、御取換のこゝを、屢願ひ出ましたが、御許がなくて、竟に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は、三方、壁を以てめぐらし、南の一方に、硝子戸があり、御机は御座所の中央に、南向に御据ゑになつてございます。この御構造を拜觀すると同時に、夏分はさぞ御暑い事でいらつしやつたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。これにつけても、

年々に思ひやれども山水を
汲みて遊ばん夏なかりけり

側測

の御製を思ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。のみならず、この御部屋には、ストーブの御設がございますけれども、三十七年の冬以來、御用ひがない。竊かに承るに、その年の冬の或朝、例の如くストーブに火を焚いてございましたが、先帝出御遊ばすや否や、「火を消せ」と仰せられる。侍從は、何故か分りませんが、たゞ仰のまゝに、火を消しました。さてその後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を、御許し遊ばされなかつたとのことでございます。　勿論大御心のほどを伺ひ奉るわけには參りませんが、侍從方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんでゐるのに、御同情を垂れさせら

桶涌

れ、兵士と艱難を共にせんとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。　それ以來は唯一箇の、小さい丸火鉢のみを、御使用遊ばされたとの御事。　今その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやられたる御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな
すきまおほかるしづが伏屋を

でございます。

この御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。　この御部屋には、先帝の御學問所において、御使用に

床・牀

なつた御遺物全部、そのまゝに据ゑ置かれてございます。

これは、今上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に、拜承致しました。　構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、卽ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。　床の間には、その當時の御軸物が掛けてあり、その前方には御劍數振横たはり、御机は中央に南面してございます。　先帝御在世の折は、我等如き者が、御机に接近することなどは、思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に燒痕がございます。　これは、先帝が御煙草を召上つていらつしやつた節、臣下より、政務を言上致しました處、先帝には、御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて、この燒痕がつくやうになつたのだと申すことでございます。　さて、この燒焦のあるテーブルの羅紗を御取換へ申上げんがため、侍臣より幾度となく願ひ出ましたけれども、斷じて御許がなかつたとの御事。　蓋し何物でも、それにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる、御儉德の至と拜察し奉ります。

紗沙

御硯箱は、明治二十年に、鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。　その中の筆は普通の御品で、我等臣

場（塲）

慚（慙）

下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに、御使ひふるしになり、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品もございました。　鋏も亦同じく普通市場にある品で、その傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。　最初は侍從の方が何かの調べに用ひた儘、其處に置き忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら顧みて慚愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に、獅子の毛皮が敷かれてございます。　これは、青山御所において遊ばされた頃から、久しく御使用にな

補捕

つたもので、毛も、次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。　そこで、臣下より御取換を願ひ出ましたが、「なに、これでよい。」とて、御許がない。　せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。　しかし、適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍從が「この邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

その傍に、ホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのものが、澤山に積み重ねてございましたから、「何に遊ばす物か。」と、侍從に尋ねました處、やはり、シャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留め置かせられた

物であるとのことでございました。

大臣方より上奏、御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして、御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを、御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に、天下の物は用ひるにその途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝は斯く萬機の政を聞召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

署暑

又傳へ承るに、先帝が、皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀、及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約に相成り、些にても冗費をば御省き遊ばしたと申すことでございます。一天萬乘の大君におはしましながら、禿びたる御筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか、皆これ、節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ、大御心に外ならぬことと存じます。

さて、御次の間には、造花や、彫刻や、種々な物品が備へられてございました。これを拜見いたしまするに、學校や展覽會などに行幸の節、御奬勵のため御持歸り、又は御買上にな

冗(冗)　穴(穴)　勵(励)

階梯(はしだて)

らせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも、格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてて、殆ど裝飾の用を爲さぬものまで、その儘になつてございます。その他、美術工藝品の如きも、皆御奬勵のためで、俗人の道樂とは、全く趣を異にしていらせられます。

御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに
　ますたのしみはあらじとぞ思ふ

とございますが、實にこのやうな御樂を求めさせられんが爲、先帝には、長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば、我等は、長い間、聖天子御一人に、非常の御苦勞をお掛け申上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民のちからのかぎりつくすこそ
　わが日の本のかためなりけれ

の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあらんかぎりを盡し、以て「我が日の本のかため」のため、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓

ふ次第でございます。（岩手縣學事年報）

机（椅子）一脚　軸物一幅　硯一面　墨一挺

刀劍一振（一口）　弓一張　歌一首　書一通（一封）

國語讀本　卷二終

文部省檢定濟
大正十四年二月廿五日

大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月二十一日訂正再版印刷
大正十四年二月二十四日訂正再版發行
大正十四年三月廿三日訂正四版發行
大正十四年四月廿三日訂正五版發行
大正十五年一月十七日訂正五版發行
大正十五年二月二十日訂正六版發行

國語讀本奥附
定價　自卷一至卷五　各金四十二錢
　　自卷六至卷十　各金四十三錢

大正十五年度臨時
定價　自卷一至卷五　各金七十一錢
　　自卷六至卷十　各金七十三錢

編者　上田萬年
同　榮田猛猪
同　鹽野新次郎

印刷兼發行者　東京市神田區三崎町三丁目卅八番地　株式會社啓成社
右代表者　布津純一
印刷所　東京市京橋區南水谷町七番地　日進舍

發行所　東京市神田區三崎町三丁目卅八番地　株式會社啓成社
電話四谷六〇四一番　振替東京一二〇五五番